

仙台市文化財調査報告書第215集

宮城県仙台市

郡山遺跡 XVII

— 平成 8 年度発掘調査概報 —



1997. 3

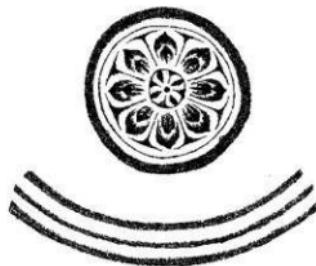
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第215集

宮城県仙台市

郡山遺跡 XII

— 平成 8 年度発掘調査概報 —



1997. 3

仙台市教育委員会



第110次調査区 SB1650 据立柱建物跡（南より）

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は16年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じております。このことは古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端をあらわした昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度はⅡ期官衙の中核部の様相を明らかにすることを目的に発掘調査を実施いたしました。その結果、中核施設のものと考えられる建物跡が発見され、Ⅱ期官衙中核の様相をこれまで以上に明らかにする成果が上がったと考えております。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にあります。そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くのご協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成9年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 篠 克 彦

例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成8年度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島栄一、豊村幸宏、森 剛男

遺構トレース 菅井百合子、岡まり子

遺物実測 豊村、菅家婦美子、吉田りつ子、伊勢多賀子、佐藤栄子

遺物トレース 菅井、伊勢、佐藤、岡、鈴木由美

遺構写真撮影 長島、豊村

遺物写真撮影 長島

遺物補修復元 赤井沢千代子、日比野園子、岡、菅井、吉田

図版作成 長島、豊村、菅井、菅家、吉田、伊勢、佐藤、岡

写真図版作成 豊村

編集は長島・豊村がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo1原点(X=0、Y=0)とし、高さは標高値で記した。

5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列などの堀跡 S E 井戸跡 S X その他の遺構

S B 建物跡 S I 竪穴住居跡・竪穴遺構 P ピット・小柱穴

S D 溝 跡 SK 土 坑

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

C 土師器(ロクロ不使用) F 丸瓦・軒丸瓦 K 石 製 品

D 土師器(ロクロ使用) G 平瓦・軒平瓦 N 金 属 製 品

E 須恵器 I 陶 器 P 土 製 品

8. 建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●=柱痕跡の検出されたもの

○=掘り方のみ検出されたもの

○=他遺構との重複により検出されたもの

●=調査区外にあり検出されないもの

9. 遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(古山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	2
III 第110次発掘調査	
1. 調査経過	4
2. 発見遺構・出土遺物	5
3.まとめ	19
IV 第111次発掘調査	
1. 調査経過	27
2. 発見遺構・出土遺物	27
3.まとめ	29
V 第113次発掘調査	
1. 調査経過	31
2. 発見遺構・出土遺物	31
3.まとめ	33
VI 第114次発掘調査	
1. 調査経過	34
2. 発見遺構・出土遺物	34
3.まとめ	34
VII 総 括	35
調査成果の普及と関連活動	44
写真図版	

I はじめに

平成8年度は郡山遺跡範囲確認調査第4次5カ年計画の2年目にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 小井川和夫

管理係 係長 千葉晴洋

主事 福井健司

主事 佐藤美弥子

調査第一係 係長 田中則和

主査 木村浩二

主事 長島桑一

文化財教諭 豊村幸宏

嘱託 森 剛男

調査第二係 係長 結城慎一

主査 篠原信彦

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大学工学部名譽教授 建築史）

副委員長 丁藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部教授 考古学）

進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）

今泉隆雄（東北大学文学部教授 歴史学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者 庄子孝、赤井沢久治

調査参加者 赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、大友節子、大友広美、岡まり子、尾形陽子、小嶋登喜子、神坂勝太郎、菅家綾美子、小池房子、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、千田あや子、日比野園子、牧かね子、吉田りつ子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

文化財記念物課：課長 山中伸一、主任埋蔵文化財調査官 岡村道雄、文化財調査官 増渕數、宮城県教育庁文化財保護課：課長 千葉景一、技術補佐 白鳥良一、文化財専門監 桑原滋郎、東京大学名譽教授 渡辺定夫、帝塚山大学教授 森都大、宮城県多賀城跡調査研究所 研究第1科長 丹羽茂、柳澤和明

II 調査計画と実績

平成8年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第4次5カ年計画における第2年次目である。第4次5カ年計画ではII期宮衙中軸部の実態を明らかにすることを目的としている。とくに昨年度から「政」の西辺部の様相を明らかにするために調査を実施している。また昨年度と今年度に限り、国庫補助事業である郡山遺跡緊急範囲確認調査のほか、同じく国庫補助事業の遺跡発掘事前総合調査と合わせて発掘調査をしている。発掘調査費については次のような内示をうけた（総経費2,500万円、国庫補助金額1,250万円）ことから、以下の実施計画を立案した。

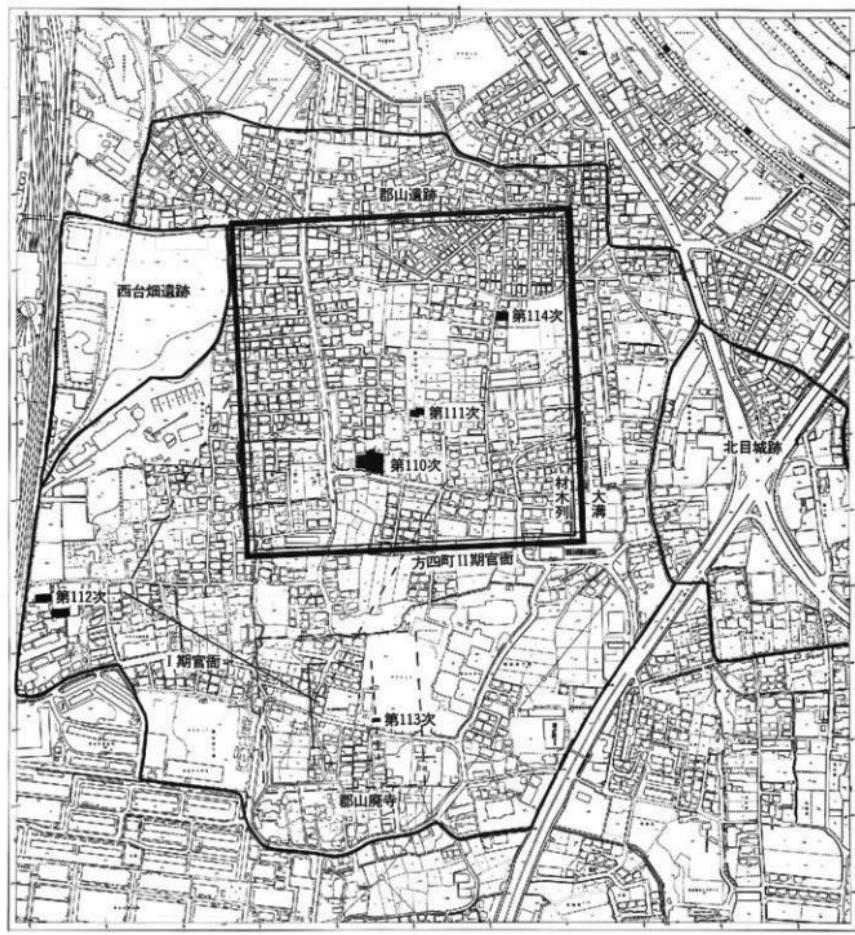
表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期積	調査予定期間
第110次	II期宮衙中央地区	1,100m ²	7月～12月
第111次	II期宮衙中央地区	180m ²	8月～10月
計	2地区	1,280m ²	7月～12月

またこの他に関連遺跡の遺構確認調査として、「仙台平野の遺跡群」で燕沢遺跡の調査も併せて立案した。事業開始後、郡山中学校の校庭の今後の使用を検討するため、郡山廃寺中軸伽藍を区画する材木列の推定東辺上で第113次調査を実施した。また郡山遺跡内の個人住宅の建て替えに伴う第114次も追加して実施した。なお第1図中の第112次調査は大規模な共同住宅建設のための事前調査であるため、国庫補助事業と別に報告する。なお第114次調査については仙台平野の遺跡群で対応しているが、郡山遺跡内の調査のため本概報に記載することとし、「仙台平野の遺跡群XVI」では概要のみを掲載する。したがって本年度の調査概報では第110次、第111次、第113次、第114次調査までの4地区的報告を掲載する。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第110次	II期宮衙中央地区	990m ²	7月4日～11月22日
第111次	II期宮衙中央地区	180m ²	8月27日～10月2日
第113次	郡山廃寺東地区	40m ²	10月28日～11月7日
第114次	II期宮衙中央東地区	10m ²	12月9日
計	4地区	1,130m ²	7月4日～12月9日



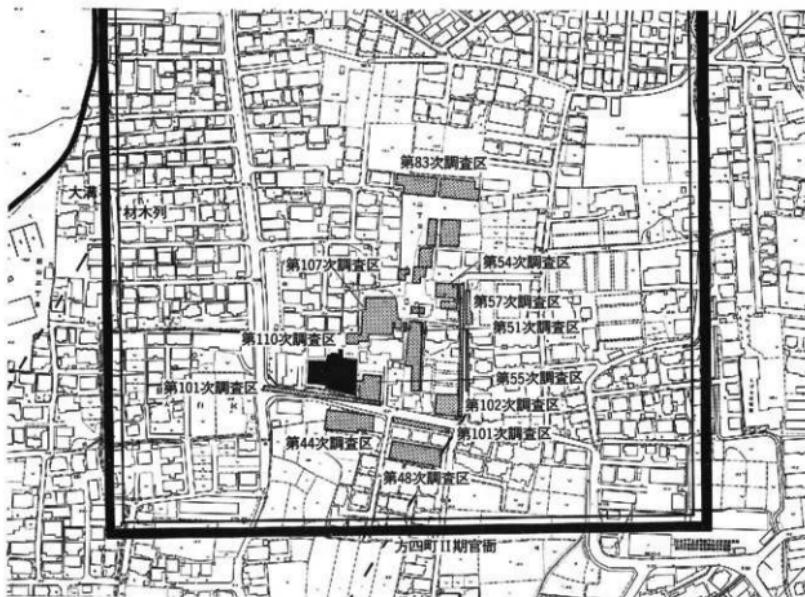
第1図 郡山遺跡全体図

III 第110次調査

1. 調査経過

第110次調査区は方四町II期官衙内部の推定政府域の西辺部に位置している。周辺で実施された調査には、昭和59年度の第44次・48次調査、昭和60年度の第51次・55次調査、平成6年度の102次調査また、平成7年度の第107次調査があげられる。そのうち、第55次調査で検出されたSA730一本柱列はII期官衙政府域の西辺を区画する施設と考えられていたが、東に位置する第102次調査区と北側の第107次調査区では想定位置にその延長部が確認できなかつた。従って方四町II期官衙内部で政府の範囲や区画施設について再検討の余地が生じていた。今次調査は、それらの点を明らかにするために実施した。

現況は標高9.9m～10.2m程の畠地である。調査区外に耕土場を確保することが困難であったため、東半部と西半部に分けて調査を実施した。東半部は7月4日から表土排除を行なった。表土の厚さは0.4～0.9m程である。表土排除の結果、基本層位IV層黄褐色シルト質粘土層を検出しこのIV層上面で遺構検出作業を行なった。調査地全体に畠の耕作の天地返しによる搅乱が及んでいるため、遺構の上面は著しく削平されていた。東半部の調査が進行し、遺構の概要がほぼ明らかとなった9月26日に報道関係に発表をし、9月28日には現地説明会を開催した。現地説明会には150名以上の市民が見学に訪れた。東半部の調査を終了し実測図作成後、10月3日より埋め戻し及び西半部の表土排除を行なった。西半部も天地返しの搅乱を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。天地返しを除去し遺構の状況が確認されたのは10月中旬である。その後、これまでの調査成果をもとに各遺構の調査を進めた。西半部の調査を終了し、埋め戻し並びに整地作業を含め一切の作業を終了したのは11月22日である。



第2図 第110回調査区位置図

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、一本柱列1列、柱列1列、材木列2列、掘立柱建物跡5棟、溝跡10条、竪穴住居跡4棟、竪穴遺構1基、井戸跡2基、土坑12基の他、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は、耕作土（第Ia層～第IIIb層）直下の基本層位第IV層上面で検出されているが、本来はこの上層から掘り込まれていたと考えられる。しかし、耕作による搅乱のためIV層より上面では遺構は検出されない。

SA1670 柱列 SD1631 溝跡の西側に平行して検出された2つの柱穴よりなる柱列である。柱間寸法は215cmで、方向はN-30°-Eである。柱穴は58～61cm×63～76cmの隅丸方形で、柱痕跡は28～31cmである。遺物は出土しなかった。

SD1629 溝跡に切られている。

SA1665 材木列 調査区の南西部でW-32°-N (N-32°-E) 方向に延びる材木列を検出した。検出長は5.8m、掘り方の上幅は20～41cm、下幅は15～27cm、深さは19～36cmである。

掘り方底面の中央部に直径6～22cmの柱痕跡が見られる。掘り方の断面形はU字形で、埋土は、暗褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土、褐色粘土である。

遺物は、掘り方より土師器坏片・甕片、須恵器甕片、弥生土器片、石器が数点出土した。

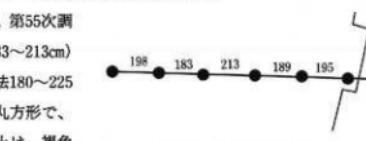
SI1666 竪穴住居跡を切り、SA1660 材木列、SD1629・1647・1652 溝跡に切られている。

SA730一本柱列 E-5°-N 方向に、5間分延びている。第55次調査の成果と合わせると、東西6間（総長11.8m、柱間寸法183～213cm）となり、L字形に折れ曲がり南に5間（総長10.2m、柱間寸法180～225cm）以上延びている。柱穴は104～119cm×105～120cmの隅丸方形で、柱痕跡は19～32cmである。柱穴の深さは40cm程度である。埋土は、褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色砂質シルトである。

W1、W4～W6 柱穴で抜き取り穴を伴っている。また柱穴には重複のあるものがある。

遺物は、W1 柱穴掘り方より土師器坏C-783（図版19-4）が出土した他、W1～W4 柱穴掘り方より土師器坏片・甕片、須恵器甕片、円面鏡が、またW5・W6 柱穴抜き取り穴より土師器坏片・甕片、須恵器坏片がそれぞれ数点出土している。

SD536・552 溝跡、SI1727 竪穴住居跡を切っている。



第3図 SA1670 模式図



第4図 SA730 模式図

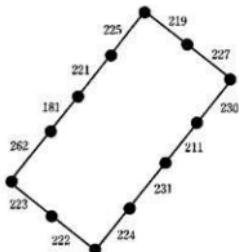
団数	遺跡番号	種別・跡形	出土地点	法 墓 (m)	外觀測定				内面測定				備 考	写真 回収
					柱直径	柱高	底幅	口幅	柱頭部	柱脚部	柱体部	柱底部		
1	C-783	柱頭部・坪	SA730	W1底2.7	3.0	11.2	9.9	9.0	コロナゲ	カズリ	カギリ	ミガキ	ミガキ	内面褐色化現 19-4

第5図 SA730一本柱列出土遺物

SA1660 材木列 調査区の西壁沿いでN-2°-E 方向に延びる材木列を検出した。検出長は拡張区を含め19.8mで更に南北に延びている。掘り方の上幅は36～62cm、下幅は18～29cm、掘り方の西壁沿いにやや蛇行して直径7～20cmの柱痕跡が見られる。上幅63～115cmの溝状の抜き取りを上方より受けている。深さは、残存状況の良い部分で検出面から底面まで54～61cmである。掘り方の断面形はU字形で、埋土は、暗褐色シルト及び粘土質シルト、灰褐色粘土質シルト及び粘土、にぶい黄褐色シルト質粘土などである。

遺物は、抜き取り溝堆積土中より、弥生土器蓋B-279（図版19-2）、須恵器坏E-394（第23図6・図版19-3）が出土した他、土師器坏片・甕片、須恵器甕片・甕片、弥生土器片、馬の両顎骨が出土した。また掘り方理土より土師器坏片・甕片、須恵器坏片・甕片、弥生土器片、砥石が出土した。

SA1665 材木列、SI1664 竪穴住居跡を切り、SD1629・1647 溝跡に切られている。



第6図 SB1655 模式図

SB1655 墨立柱建物跡 衍行4間(総長8.96m、柱間寸法181~262cm)、梁行2間(総長4.46m、柱間寸法219~227cm)の南北棟の建物跡で、方向は西衍行でN-32°-Eである。柱穴は35~58cm×37~59cmの隅丸方形で、柱痕跡は9~22cmである。柱穴の深さは50cm程である。埋土は、暗褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土質シルト及びシルト質粘土、褐色粘土質シルトである。

遺物は、N5E1・N5E2 柱穴掘り方より土師器坏片・甕片が数点出土している。

SA1665 材木列、SI1666 穴住居跡を切り、SD1629・1647 溝跡に切られている。



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
K1W1				N1W2			
1 10YR3/7 暗褐色	シルト質粘土 にぶい黄褐色土を少々含む			1 10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト 暗褐色土を斑状、鉄化度を含む		
2 a 10VN4/4 黒褐色	粘土質シルト 暗褐色土を少々含む			2 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト 暗褐色土を小ブロック状に含む		
2 b 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト			3 10YR5/4 黄褐色	シルト質粘土		
3 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト						
				N1W3			
				1 10YR3/4 黄褐色	シルト質粘土		
				2 10YR4/4 黑褐色	粘土質シルト 鉄化度土を全体に多量に含む		
				3 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト 暗褐色土を少々含む		

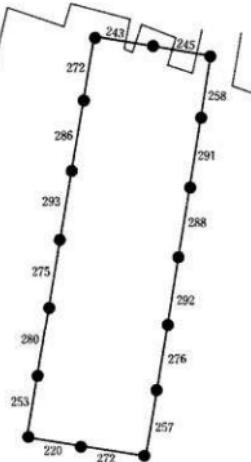
第7図 SB1655 墨立柱建物跡断面図

SB1650 墨立柱建物跡 衍行6間(総長16.62m、柱間寸法253~293cm)、梁行2間(総長4.92m、柱間寸法220~272cm)の南北棟の建物跡で、方向は西衍行でN-3°-Eである。柱穴は56~126cm×76~132cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、柱痕跡は21~42cmである。柱穴の深さは60cm程である。埋土は、灰黄褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土、暗褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルト質粘土及び粘土、黒褐色粘土などである。N1W1・N1W2 柱穴以外の全ての柱穴で抜き取り穴を伴っている。また、N1E1・N4E1・N5E1・N5W1・N7E1・N7W2 柱穴の柱痕跡底面に20cm前後の河原石が1個~数個置かれている。

遺物は、各柱穴掘り方より、土師器坏片・甕片・須恵器坏片・蓋片・鉄滓が出土した。

SD1631 溝跡を切り、SD1629 溝跡に切られている。

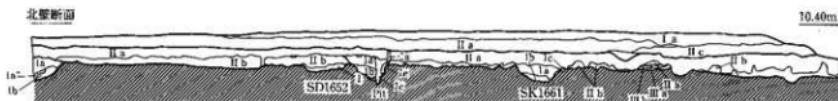
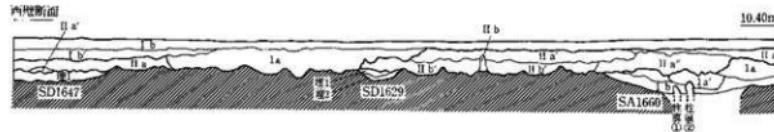
SB777 墨立柱建物跡 第55次でこの建物跡の東南隅を検出しており、今回の調査で全容が明らかとなった。衍行5間(総長9.98m、柱間寸法178~219cm)、梁行2間(総長5m以上、柱間寸法223~310cm)の南北棟の建物跡で、方向は西衍行でN-5°-Wである。柱穴は61~75cm×78~91cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、柱痕跡は24~29cmである。柱穴の深さは40cm程である。埋土は、褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色シルト質粘土、暗褐色シルト質粘土である。



第8図 SB1650 模式図

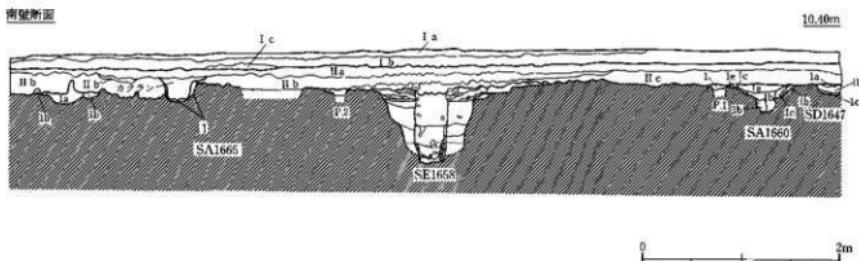


第9図 第110次調査区平面図



地層名	層位	土色	土性	備考
I a	10YR4/4 黄褐色	シルト		
I b	10YR3/3 灰褐色	粘土質シルト		
I b'	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト	炭化物を含む	
I c	10YR4/4 黄褐色	シルト		
I d	10YR3/3 灰褐色	粘土質シルト		
II a	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト		
II a'	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト	火山灰を多量に含む	
II a''	10YR3/3 灰褐色	シルト		
II b	10YR5/6 青褐色	シルト		
II b'	10YR3/3 灰褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む	
II c	10YR4/4 黄褐色	シルト		
II e	10YR5/6 青褐色	シルト		
II e'	10YR4/4 黄褐色	シルト		
II e''	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト		
II e'''	10YR3/4 灰褐色	シルト		
SD1647	1	10YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	
SD1629	1	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	
SA1660	1	10YR4/4 黄褐色	シルト質シルト	炭化物を全体に含む
2	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土		

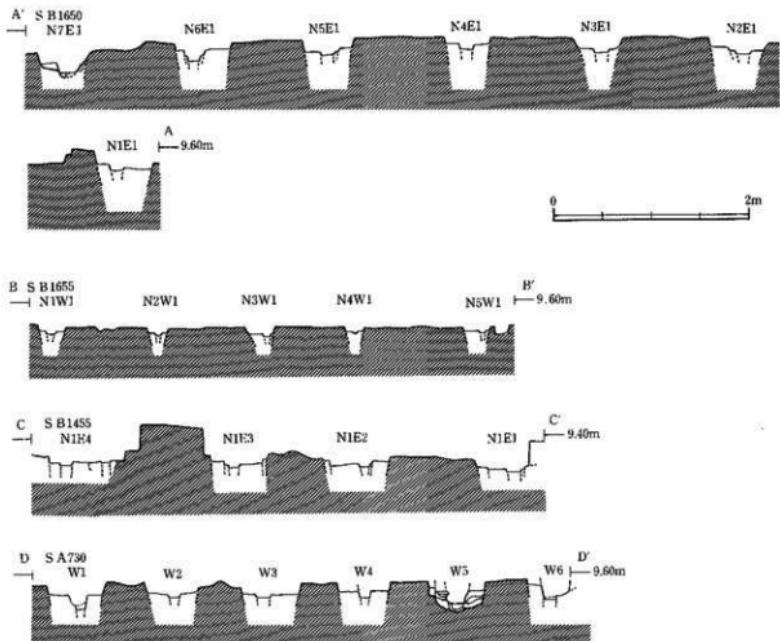
地層名	層位	土色	土性	備考
SA1660	地表付近	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	
	地底付近	10YR3/4 灰褐色	粘土	
I a	10YR5/2 灰黃褐色	シルト質粘土上		
I a'	10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土上		
I b	10YR4/2 灰褐色	シルト質粘土上		
SD1652	I	10YR5/6 青褐色	粘土質シルト	
Pn	I a	10YR4/4 黄褐色	シルト	
I b	10YR3/2 灰褐色	粘土質シルト		
I c	10YR4/4 黄褐色	シルト	炭化物を少量含む	
I d	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト		
I e	10YR3/2 灰褐色	粘土質シルト		
SK1661	I a	10YR4/2 灰褐色	シルト質粘土上	
I b	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む	
I c	10YR3/4 灰褐色	シルト質粘土上		



地層名	層位	土色	土性	備考
I a	10YR4/4 黄褐色	シルト		
I b	10YR4/3 黄褐色	シルト		
I c	10YR3/3 灰褐色	シルト	炭化物を少量含む	
II a	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト		
II b	10YR3/3 灰褐色	シルト		
II b'	10YR3/3 灰褐色	シルト	炭化物をプロック状に含む	
II c	10YR4/3 灰褐色	シルト	炭化物を少量含む	
III	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト		
IV a	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト		

地層名	層位	土色	土性	備考
SA1660	I	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	
Pn2	I a	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	
	I b	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	
Pn1	I	10YR3/2 灰褐色	粘土質シルト	
SA1660	I a	10YR3/3 灰褐色	シルト	
	I b	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	
	I c	10YR3/3 灰褐色	シルト質シルト	炭化物を少量含り、マンゴンを数個見つかる
	I d	10YR4/2 に近い黄褐色	シルト質粘土	
	I e	10YR4/2 に近い黄褐色	シルト質粘土上	
SD1647	I f	10YR5/2 灰褐色	粘土	
	I g	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト質粘土上	
	I h	10YR5/2 灰褐色	シルト質粘土	
	I i	10YR3/3 黄褐色	シルト質シルト	炭化物を多く含む

第10図 第110次調査区断面図



第110回調査区一本柱・掘立柱建物跡断面図

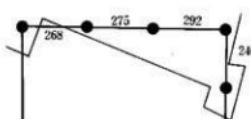
遺物は、N1W1・N1W2・N2W1・N6W1柱穴掘り方より、土師器壊片・壺片、須恵器壊片・壺片・壺片が少量出土した他、N3W1柱穴掘り方より須恵器平瓶の口縁部片が1点出土している。

SD536・552溝跡、SI1634豎穴構造を切り、SD1628・1629・1647溝跡に切られている。

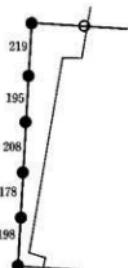
SB1455A・B・C 掘立柱建物跡 南北1間（柱間寸法246cm）以上、東西3間（総長8.35m、柱間寸法268～292cm）の建物跡で、方向は北柱列でE-5°-Nである。柱穴は52～121cm×69～105cmの楕丸方形もしくは楕丸長方形で、柱旗跡は19～28cmである。ほぼ同位置・同規模で建て替えられているが、柱穴の掘り方の規模は最も新しい時期の柱穴（C）がやや小さく平面形も楕丸長方形である。深さは新しい時期から順に70・50・40cm程度である。埋土は、褐色粘土質シルト及びシルト質粘土、にぶい黄褐色粘土質シルト及び粘土、暗褐色シルト質粘土及び粘土、黒褐色シルト質粘土及び粘土である。

遺物は、SB1455BのN2E1柱穴掘り方より、土師器壊の体部片が2点出土した他、SB1455CのN1E1・N1E2・N2E1柱穴掘り方より、土師器壊片・壺片、須恵器壊片・壺片・壺片が出土した。

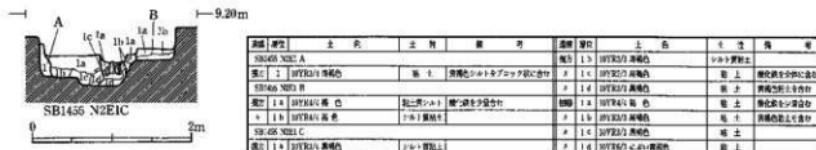
SD552溝跡、SI727豎穴住居跡を切っている。



第13回 SB1455 模式図



第12回 SB777 模式図



第14図 SB1455 据立柱建物跡柱穴断面図

SB1646 据立柱建物跡 衍行1間(総長3.93m、柱間寸法381~393cm)、梁行1間(総長2.55m、柱間寸法234~255cm)の東西棟の建物跡で、方向は北桁行でW-4'-Nである。柱穴は、直径28~45cmの円形もしくは梢円形で、柱痕跡は9~16cmである。遺物は出土しなかった。

SD536・552溝跡を切っている。

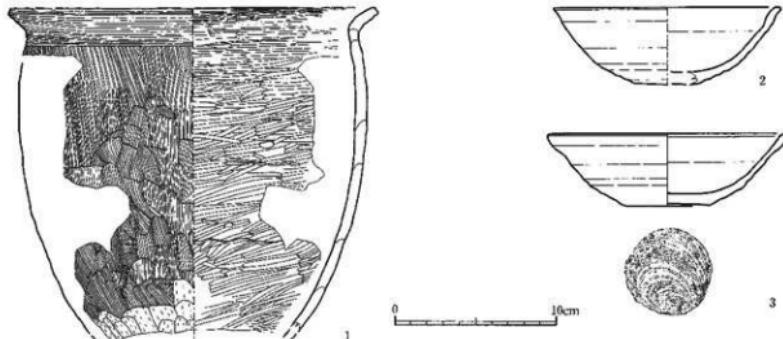
SI1634 穫穴遺構 東西1.70m以上、南北3.4mの隅丸方形の竪穴遺構である。西辺の方向はN-16°-Eである。残存する壁高は7cm程度である。

遺物は、土器器坏片・甕片・須恵器器片が出土している。

SD536、552溝跡を切り、SB777 据立柱建物跡、SD1629 溝跡に切られている。

SI1636 穫穴住居跡 東西2.50m、南北2.9mの不整長方形で、西辺での方向はN-17°-Eである。削平が著しく、住居跡の掘り方のみを検出した。北東隅で焼土と土器片が検出されたことからカマドの痕跡と推定された。またその南には長軸76cm、短軸63cm、深さ15cm程の梢円形の落ち込みがある。

遺物は、土器器坏 C-781(第15図1)、須恵器器坏 E-396(第15図3) 赤焼き土器器坏 E-399(第15図2)、須恵器器片が出土している。



地層番号	登録番号	種別・基形	出土位置	法面寸法 (cm)	外観調査	内観調査	備考	写真回数
1	C-781	土器器坏・甕	SI1636	1 (30.0) (22.0)	ヨコナメ バルブリーフ	ミガキ えがき		20-1
2	E-396	赤焼き土器・坏	SI1636	1 4.8 (14.0) (1.0)	ヨコナメ	ヨコナメ		21-7
3	E-396	須恵器・坏	SI1636	1 4.5 15.0 5.2	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	20-2

第15図 SI1636 穫穴住居跡出土遺物

SI1664 穫穴住居跡 東西4.3m、南北7.8mの長方形で、東辺での方向はN-30°-Eである。中央部は削平され、部分的に周溝のみが残存している。遺構の検出のみにとどめている。

遺物は、須恵器器片が出土している。

SA1660 材木列、SD1629、1652溝跡、SK1654 土坑に切られている。

SI1666 穫穴住居跡 東西7.1m、南北5.4mの隅丸長方形で、西辺での方向はN-41°-Eである。遺構の検出のみにとどめている。

遺物は、土師器壺C-786（図版20-3）・坏片、須恵器壺片、鉄滓が出土している。

SA1665 材木列、SB1655 掘立柱建物跡、SD1647、1652溝跡、SE1658 井戸跡に切られている。

SI1727 穫穴住居跡 調査区の南東端で住居跡の一部を検出した。南北2m以上で、一部に焼土が認められる。第55次調査の測定結果と合わせると規模は、東西3.2m、南北5.0mの長方形で、西辺での方向はN-30°-E。今次調査では遺構の検出にとどめている。遺物は出土しなかった。

SA730一本柱列、SB1455A、B、C 掘立柱建物跡に切られている。

SD1628 溝跡 調査区の南東部で検出した SD1673 溝跡と併に、SA730一本柱列、SB1455 掘立柱建物跡の北西部をL字形に開む溝跡である。上幅58~90cm、底面幅28~54cm、深さ10~59cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は起状がある。方向はE-5°-Nで、検出した東端から13m西側に延びている。堆積土は褐色粘土質シルト、にい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、須恵器壺E-397（第23図1）、壺片が出土している。

SB777 掘立柱建物跡、SD536、552溝跡を切っている。

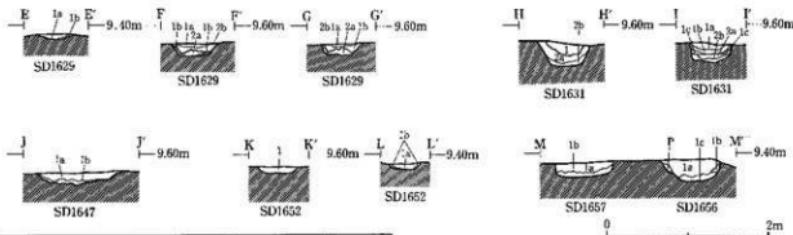
SD1629 溝跡 上幅30~70cm、底面幅15~30cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE-7°-Sで、検出した総長は36.3m程である。堆積土は灰黄褐色シルト質粘土である。

遺物は土師器坏片が出土している。

SA1660、1665材木列、SA1670柱列、SB777、1650、1655掘立柱建物跡、SK1654土坑、SI1664 穫穴住居跡を切っている。

SD1631 溝跡 調査区の南に逆くの字形に折れ曲がって延びる溝跡である。上幅51~74cm、底面幅15~27cm、深さ15~27cm、断面形は鍋底形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向は南半部がN-30°-Eで、北半部ではN-26°-Wに屈折し調査区外へ延びている。堆積土は褐色粘土質シルトである。

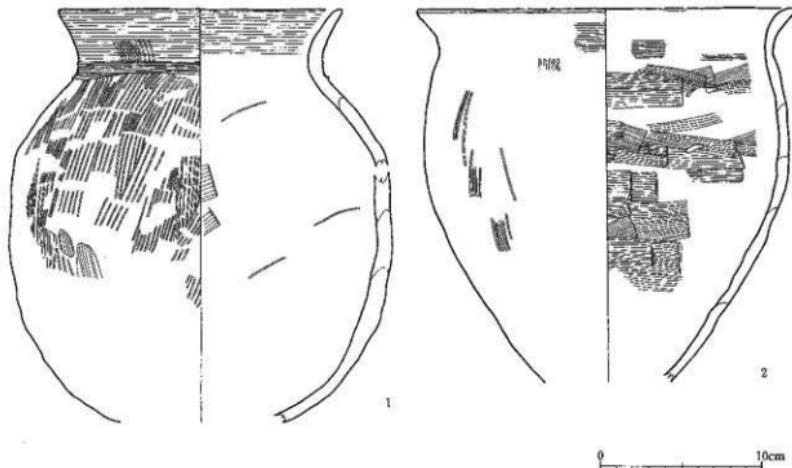
遺物は、底面上より土師器壺C-777、C-788（第17図1、2）が出土している。



遺構名	部位	土色	土質	概 要
SD1629	1 #	10YR4/2 黄褐色	シルト	炭化穀を多く含む H-E
	1 b	10YR4/7 にい黄褐色	シルト	炭化穀を多く含む
SD1629	2 #	10YR4/7 にい黄褐色	シルト	P-P' G-G'
	2 a	10YR4/7 黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルト
SD1629	2 d	10YR4/7 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土をブロック状に含む
	2 b	10YR4/7 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土を2種以上多く含む
SD1631	1 #	10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト	H-H'
	2 #	10YR3/6 黄褐色	粘土質シルト	調査のシルト質粘土をブロック状に含む
SD1631	2 a	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土をブロック状に含む
	2 c	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土をブロック状に含む
SD1631	3 #	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	1-T
	3 b	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	調査のシルト質粘土をブロック状に含む
SD1631	3 c	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色粘土をブロック状に含む
	3 d	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	サンクション含む
SD1631	2 b	10YR4/3 にい黄褐色	粘土	炭化穀を含む

遺構名	部位	土色	土質	概 要
SD1647	1 #	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土	H-J
	1 b	10YR4/2 にい黄褐色	粘土	にい黄褐色粘土をブロック状に含む
SD1652	1	10YR4/6 黄褐色	地上性シルト	K-K'
	1 d	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	SD1652
SD1652	1 a	10YR4/6 黄褐色	シルト	L-L'
	1 b	10YR4/6 黄褐色	シルト	SD1652
SD1657	1 b	10YR4/6 黄褐色	シルト	M-M'
	1 c	10YR4/6 黄褐色	粘土	SD1656
SD1656	1	10YR4/2 黄褐色	シルト	SD1656
	1 c	10YR4/6 黄褐色	シルト	SD1656

第16図 第110次調査区溝跡断面図



第17図 SD1631溝跡出土遺物

SB1650 捣立柱建物跡、SD1629、1647溝跡、SK1633、1637土坑に切られている。

SD1647 溝跡 上幅40~110cm、底面幅20~80cm、深さ10cm程度で、断面形は鍋底形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向はE-7°-Sで、検出した総長は13.5mであるが、調査区の東にも延びていた痕跡が断面等で認められる。堆積土は灰黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、土器部壺片・壺片、弥生土器鉢片、鐵滓が出土している。

SB1655 捣立柱建物、SA1660、1665材木列跡、SE1653 井戸跡、SK1651 土坑、SI1666 穫穴住居跡を切っている。

SD1652 溝跡 上幅40~60cm、底面幅10~30cm、深さ5~12cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-1°-Sでほぼ真北方向で、検出した総長は13.6mである。南端部は不明瞭となる。SB1650 建物跡の桁行並びにSA1660 材木列の方向と平行している。堆積土は黄褐色粘土質シルトである。遺物は、須恵器甕片が出土している。

SI1664、1666竪穴住居跡、SA1665 材木列を切り、SD1629 溝跡に切られている。

SD1656 溝跡 上幅33~74cm、底面幅18~57cm、深さ19~31cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は外傾しながら緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-26°-Eで、検出した総長は3.7mである。堆積土は黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1657 溝跡 上幅40~91cm、底面幅23~69cm、深さ7~23cm、断面形は偏平なU字形の溝跡である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-32°-Eで、検出した総長は4.3mである。堆積土は黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1673 溝跡 調査区の南東部で検出した SD1628 溝跡と共に、SA730一本柱列、SB1455 捣立柱建物跡の北西側をL字形に囲む溝跡である。上幅38~66cm、底面幅9~29cm、深さ12~56cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は

直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は N-1°-W で、検出した北端から 4.9m 南側に延びている。堆積土は褐色、にぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、土師器坏片・壺片、弥生土器片が少量出土している。

SD536 溝跡 上幅 220cm 程、底面幅 69~88cm、深さ 79~92cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向は N-34°-E で、検出した総長は 23m 程である。堆積土は暗褐色、灰黃褐色、黃褐色粘土質シルトなどである。

遺物は、土師器壺片が底面から出土し、土師器坏片・銅鋌、弥生土器片が堆積土から出土している。

SA730 一本柱列、**SB777**、**1646**掘立柱建物跡、**SD552**、**1628**、**1629**、**1647**溝跡、**SK1632 土坑**、**SII1634** 穂穴溝構に切られている。

SD552 溝跡 上幅 220~280cm、底面幅 74~107cm、深さ 57~62cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。方向は N-33°-E で、検出した総長は 19m 程である。堆積土は 2 層に大別され、下層は灰黃褐色シルト、粘土質シルト、上層は、にぶい黄褐色シルトである。上層の 1 b 層は、版築状に互層となっており、丁寧に整地されて埋め戻されている。遺物は出土しなかった。

SD536 溝跡を切り、**SA730 一本柱列**、**SB777**、**1455**、**1646**掘立柱建物跡、**SD1628**、**1629**、**1647**溝跡、**SK1632 土坑**、**SII1634** 穂穴溝構に切られている。

SK1632 土坑 長軸 4.50m、短軸 2.35m の不整梢円形を呈する大型の土坑で、深さは 25~70cm である。底面は北半で浅くなり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、にぶい黄褐色シルト、粘土質シルト、褐色、暗褐色シルト質粘土などである。遺物は須恵器坏 E-392 (第23図2) が出土している。

SD536、552溝跡を切っている。

SK1633 土坑 直径は 2.50m のほぼ円形の土坑で、深さは 50~75cm である。底面は西側にやや落ち込んでいる。壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、底面には酸化鉄が集積している。

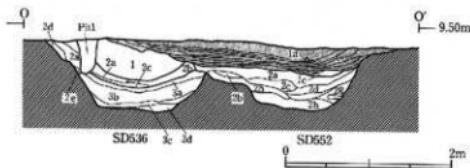
遺物は、土師器坏片・壺片が出土している。

SD1631 溝跡を切っている。

SK1637 土坑 長軸 1.50m、短軸 1.25m の隅丸長方形を呈する土坑で、深さは 25cm 程である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、にぶい黄褐色シルトで、炭化物を少量含んでいる。

遺物は、土師器坏片が出土している。

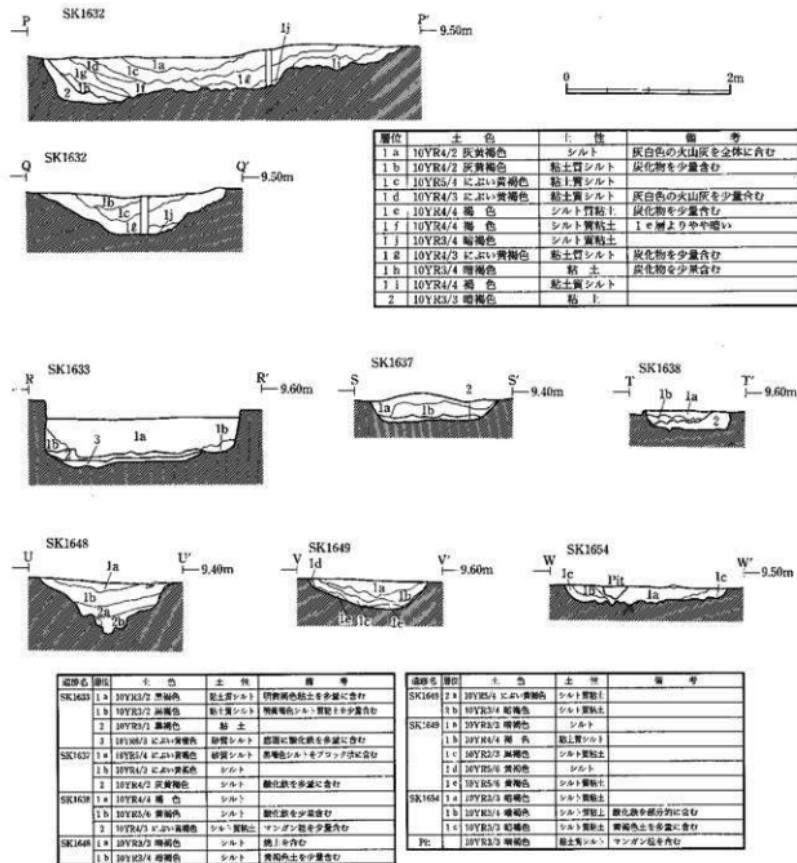
SD1631 溝跡を切っている。



SD536・SD552セクション

剖位	土 色	土 性	備 考
SD536			
1	10YR2/3 暗褐色	粘土質シルト	
2 a	10YR5/6 褐色	粘土質シルト	
2 b	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2 c	10YR2/2 暗黃褐色	粘土質シルト	
2 d	10YR5/4 にぶい黃褐色	シルト	炭化物を微量に含む
2 e	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	
3 a	10YR4/2 暗褐色	粘土質シルト	
3 b	10YR4/2 暗褐色	粘土質シルト	
3 c	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘 土	酸化鉄斑を少量含む
3 d	10YR6/2 暗褐色	粘 土	酸化鉄斑を多量に含む
Pt	1 10YR4/3 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトを含む
SD552			
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄褐色と互層
1b-(1)	10YR7/3 にぶい黄褐色	シルト	
1b-(2)	10YR4/2 にぶい黄褐色	シルト	
1b-(3)	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を微量に含む
1 c	10YR4/2 黄褐色	シルト	
2 a	10YR5/2 黄褐色	シルト	下部に酸化鉄を含む
2 b	10YR4/2 黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン鉄を多量に含む
2 c	10YR5/2 黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
2 d	10YR6/2 黒褐色	粘土質シルト	
2 e	10YR5/2 黑褐色	粘 土	
2 f	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土を含む
2 g	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	
2 h	10YR6/2 黑褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む

第18図 SD536・552溝跡断面図



第110回 調査区土坑断面図

SK1638 土坑 長軸1.10m、短軸0.40mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さは23cmである。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。堆積土は、黄褐色シルト、に近い黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

SK1648 土坑 長軸1.75m、短軸1.50mの不整楕円形を呈する土坑で、深さは68cmである。底面は凹凸があり、壁は段を有しながら立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト、に近い黄褐色シルト質粘土である。少量の焼土を含む。

遺物は、土師器壺C-782(第23回9)、須恵片、鐵滓が出土している。

SK1649 土坑 長軸1.60m、短軸1.45mのほぼ円形を呈する土坑で、深さは33cmである。底面は西から東へと傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト、黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、土師器壺片・甕片、弥生土器片が出土している。



第20図 SK1651土坑出土遺物

SK1651 土坑 長軸1.00m、短軸0.70mの不整橢円形を呈する土坑で、深さは7~15cm程度である。底面は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルトである。

遺物は、弥生土器蓋B-275、鉢B-280、鉢B-276(第20図1、2、3)が出土している。

SD1647溝跡に切られている。

SK1654 土坑 長軸2.38m、短軸1.35mの不整橢円形を呈する土坑で、深さは15~17cm程度である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

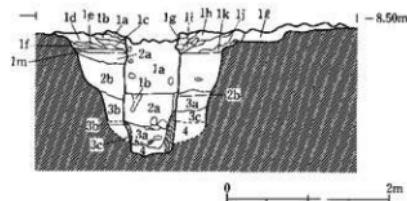
SD1629溝跡に切られ、SI1664竪穴住居跡を切っている。

SK1661 土坑 長軸0.75m、短軸0.35mの楕円形の土坑で、深さは17cm程度である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、灰黄褐色粘土質シルトで酸化鉄、炭化物などを含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK1662 土坑 長軸0.76m、短軸0.73mのほぼ圓正方形の土坑で、深さは10~20cm程度である。底面は中央にやや落ち込みがあり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土中には小礫が混入している。遺物は出土しなかった。

SI1666竪穴住居跡を切り、SE1658井戸跡に切られている。

SE1658 井戸跡 挖り方は東西2.6m、南北は1.9m以上の方で検出した面より10cm程の深さで、長軸1.85m、短軸1.75mの不整形となる。掘り方の方向は、西辺でN-26°-Eである。掘り方の中央からやや東よりに東西0.6~0.7m、南北0.6~0.7m、深さ1.55mの井戸枠が検出された。井戸枠の方向は、東辺でN-11°-Eである。I部の木質はほとんど残存しておらず、土圧によりやや歪



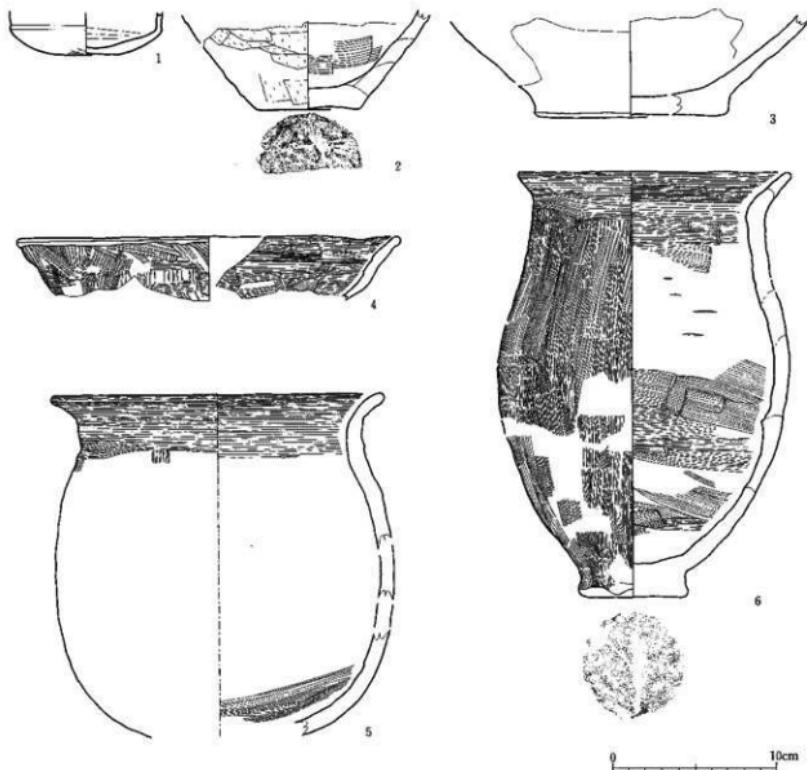
第21図 SE1658井戸跡断面図

遺構名	層位	土色	上性	備考
井戸枠内	1 a	10YR3/4 塗褐色	シルト質粘土	
	1 b	10YR3/3 塗褐色	粘土	
	2 a	10YR4/2 灰黃褐色	粘土	縫合
	2 b	2.5Y3/1 黄褐色	粘土	
	2 c	2.5Y4/1 黄褐色	粘土	
	2 d	2.5Y6/3 に近い黄色	砂質シルト	
	3 c	10YR4/1 塗褐色	粘土	
	4	10YR4/1 塗褐色	粘土	グライ化
掘り方	1 a	10YR4/4 塗色	シルト	地下水を吸収し固む
	1 b	10YR4/6 塗色	粘土質シルト	黄褐色土を多量に含む
	1 c	10YR4/4 塗色	シルト質粘土	
	1 d	10YR4/6 塗色	シルト	黄褐色土を多量に含む
	1 e	10YR4/4 塗色	シルト質粘土	
	1 f	10YR4/3 に近い黃褐色	シルト質粘土	

遺構名	層位	土色	上性	備考
掘り方	1 g	10YR4/3 塗色	シルト	黄褐色を斑状に含む
	1 h	10YR4/3 黄褐色	シルト	変化物を微量に含む
	1 i	10YR4/4 塗色	粘土質シルト	地上上、変化物を微量に含む
	1 j	10YR4/4 塗色	粘土質シルト	
	1 k	10YR4/2 に近い黄褐色	粘土質シルト	
	1 l	10YR4/4 塗色	シルト質粘土	黄褐色土を部分的に含む
	1 m	10YR5/2 黄褐色	シルト	
	2 a	10YR4/7 黄褐色	シルト質粘土	
	2 b	10YR5/2 黄褐色	粘土質シルト	
	2 c	10YR4/4 塗色	シルト質粘土	
	2 d	10YR4/4 塗色	シルト質粘土	
	2 e	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 f	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 g	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 h	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 i	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 j	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 k	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 l	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	2 m	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	
	3 a	10YR4/6 塗色	シルト質粘土	変化物を含む
	3 b	10YR4/2 黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
	3 c	10YR4/2 黄褐色	粘土	酸化鉄を少額に含む
	3 d	10YR4/2 黄褐色	粘土	酸化鉄を少額に含む
	4	10YR4/2 黄褐色	粘土	グライ化

んでいる。下部では板材が残存し、幅10×50cm、厚さ5cmの板材が縦位に配されている。北西隅には割り枕状の材が隅木として使われている。井戸枠内の堆積土は3層に大別され、2層の上面には河原石、3層の上面には土師器壺の破片が集中して出土した。

遺物は、土師器壺C-779(第22図5)・C-780(第22図4)・C-784(第22図2)・C-785(第22図3)・C-778(第22図6)、須恵器壺E-393(第22図1)、円面鏡E-390(図版19-13)、平瓦片、弥生土器片が出土している。



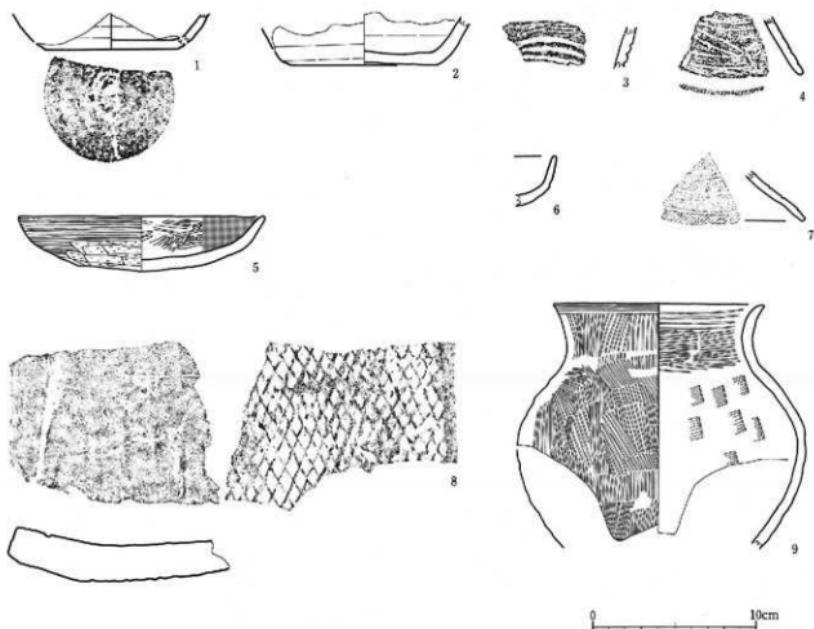
図版 番号	登録番号	種別・形態	出土 地点	法 量 (cm)	外 面 調 査	内 面 調 査	備 考	写真図版
1	E-393	須恵器・壺	SE1658 1(井戸枠内)	(2.6) (9.4) 4.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	19-14	
2	C-784	土師器・壺	SE1658 2(井戸枠内)	(5.1) 6.4	ヘラケズリ ナデ	ヘラナデ	19-11	
3	C-785	土師器・壺	SE1658 1(縫合方)	(6.0) 5.9	ヘラケズリ ナデ	ヘラナデ	19-12	
4	C-780	土師器・壺	SE1658 2(井戸枠内)	(4.0) (23.6)	ハメ→ミナフ	ハメ	19-10	
5	C-779	土師器・壺	SE1658 2(井戸枠内)	(21.0) (20.4)	ロコナデ ハゲヌ	ロコナデ ヘラナデ	19-9	
6	C-778	土師器・壺	SE1658 2(井戸枠内)	26.1 (16.7) 6.6	タコナデ ハケヌ	タコナデ ヘラナデ	19-8	

第22図 SE1658井戸跡出土遺物

SI1666 穫穴住居跡、SK1662 土坑を切っている。

SE1653 井戸跡 直径 1m の円形素掘りの井戸跡で、深さ80cm以上である。徐々にすばまり、検出面より35cm程の深さで直径65cmの円形となる。堆積土は、上層が暗褐色シルト、黒褐色シルト質粘土、灰黄褐色粘土で、下層は暗褐色シルト質粘土で酸化鉄、炭化物を少量含んでいる。遺物は出土しなかった。

SD1647 溝跡に切られている。

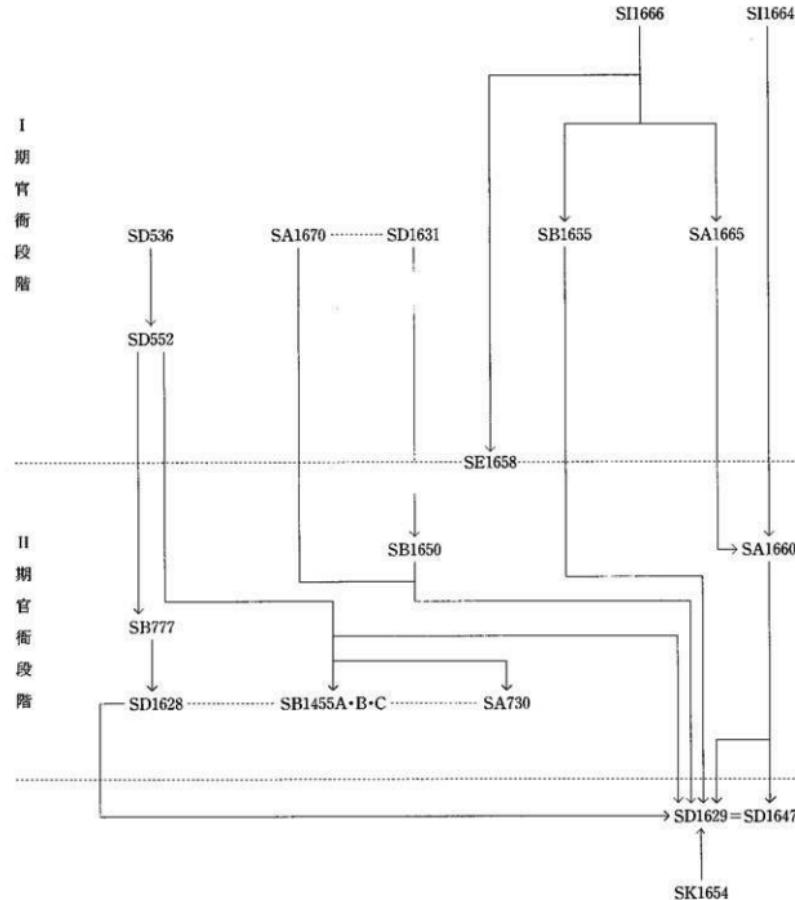


回数 番号	遺跡名	種別・型別	出土地点	深さ (m)	外 形 概 要	内 部 構 造	備 考	写真添付
1 E-397	廻遊型・坪	出土遺物	場所	2	8.2	ヒラリナデ 底面ハラカリ	ロクロナデ	20-4
2 E-392	廻遊型・坪	SK1632			8.8	ヒラリナデ トトキリナデ	ロクロナデ	
3 H-278	先史土器・縁		地表面			L.R施文		19-1
4 B-277	先史土器・蓋		地表面			沈線一網目 L.R施文		
5 C-789	土器断面		地表面	3.35	15	ヨコナデ ハラケズリ	ミガキ	内部黑色處理 21-6
6 E-394	廻遊型・坪	SA1660				ロクロナデ 底面ハラケズリ	ロクロナデ	
7 B-281	布紋土器・蓋	SK1648				L.R施文一比較 →底ミガキ	ミガキ	
8 G-79	平・丸		地表面			門面: 塗書き・白目底、内面: 銅格子柄		21-8
9 C-782	土器断面・底	SK1608		13	ヨコナデ・ハラ	ハケヌメ ハラケズリ		20-5

第23図 第110次調査区出土遺物

3. まとめ

発見された遺構は、一本柱列1列、柱列1列、材木列2列、掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡4軒、竪穴遺構1基、溝跡9条、井戸跡2基、土杭12基、多数の小柱穴・ビットなどである。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。(並列関係は、必ずしも遺構の同時性を示すものではない。)



(1) I期官衙の遺構群……SB1655 挖立柱建物跡・SA1670 柱列

SA1665 材本列・SD536・552・1631 溝跡

SI1664・1666 穫穴住居跡

これらの遺構の方向は以下のようになる。

SB1655 (N-31°-E) S1670 (N-30°-E) SA1665 (N-32°-E)

SD536 (N-34°-E) SD552 (N-33°-E) SD1631 (N-33°-E)

SI1664 (N-30°-E) SI1666 (N-33°-E)

I期官衙の中中枢部付近では、遺構の方向が真北から30°～33°東に偏するものが多く、今回の調査でもそれに含まれる遺構が多い。

これらの遺構のうち、SD536、SD552 溝跡は昭和59年度の第44次調査では重複が不明瞭であったが、今回の調査で、SD536 が SD552 に切られていることが明らかとなった(註1)。とくに SD552 については、下層は水性堆積による粘土の堆積の顯著であるが、上層では 2～9 cm の土層が版築状に積み重なっており、SD552 の終末の時期にきわめて意図的に埋められたことを示していると考えられる。南方の第44次調査区では、同じ SD552 にはこのような堆積状況は確認されなかった。したがって今回の調査区付近の限定された範囲でのみ丁寧な埋め戻し作業が行われていことになる。これは I期官衙の廃棄が II期官衙の造営と連動した可能性を示しており、方四町II官衙の中中枢部に限って、きわめて丁寧な整地事業を実施したことを示すものであろう。

この SD552、あるいは前段階の SD536 と平行する SD1631 に接まれた間は、SD552 と SD1631 の間で 10m、SD536 と SD1631 の間で 9 m 程度ある。周辺の I期官衙の遺構配置を見ると、この間は第24図のように遺構が検出されず、その両側には建物跡などの遺構が配置されている。このような様相から SD536、552 と SD1631 の間は官衙内の通路として使用されていた可能性があろう。

また調査区の西半部で検出した SI1664 と SB1655 は、ほぼ同方向で 4 m 離れて建ち並んでいる。このような様相は昭和58年度の第35次調査での SB432 と SI443 などにも見られ、I期官衙の中で挖立柱建物跡と竪穴住居跡が同時に建ち並んで官衙内の官舎を構成していたのだろうと考えている(註2)。今回検出した SI1664 と SB1655 も同様に I期官衙の一部を構成していたのであろうと考えられる。

(2) II期官衙の遺構群……SB777・1455・1650 挖立柱建物跡・SA1660 材本列

SA730 一本柱列・SD1628・1673 溝跡

II期官衙中枢部の遺構については、平成6年度の第102次調査や平成7年度の第107次調査により「造営基準方向が真北、およびやや東に偏する建物群」(A群) から「造営基準方向が真北から西に偏する建物群」(B群) へと変遷(A期→B期) していることが明らかになっている(註3)。今回の調査区では II期官衙の遺構について、これまでの調査成果に従えば以下のようになる。

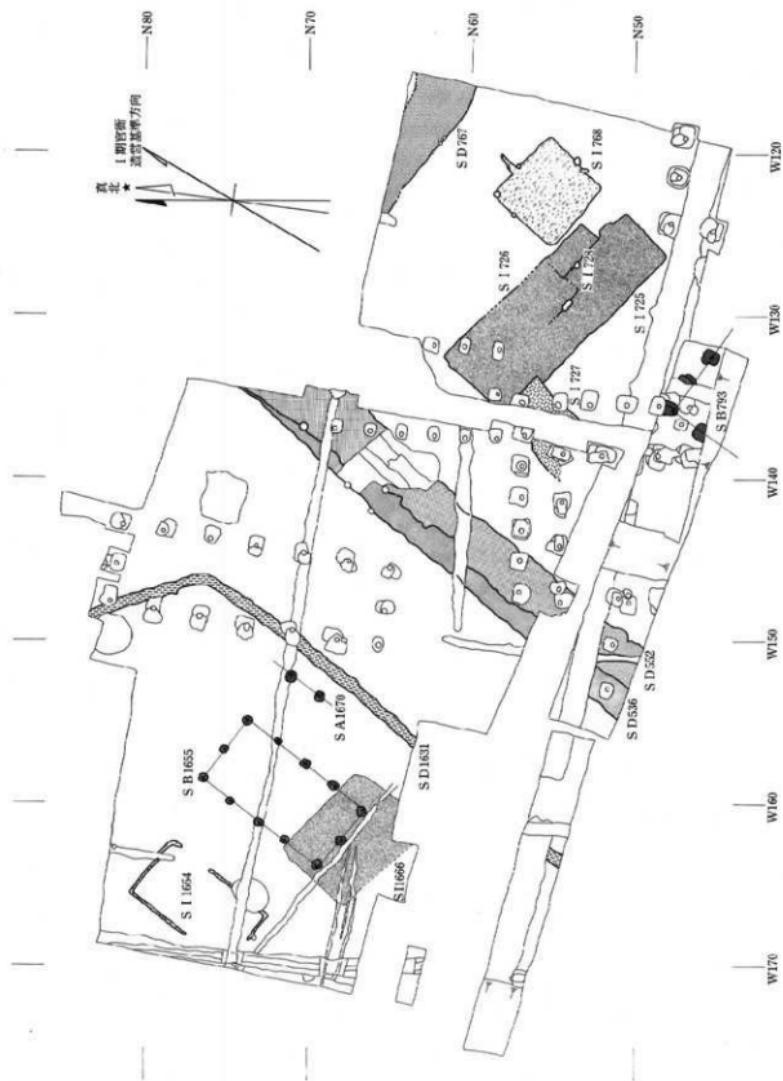
A群：SB1650 (N-3°-E) SA1660 (N-2°-E)

B群：SB777 (N-5°-W) SD1628 (E-5°-N) SD1673 (N-1°-W)

SA730 (E-5°-N) SB1455A・B・C (E-5°-N)

A群とした遺構の中で、SB1650 挖立柱建物跡は桁行6間×梁行2間の南北棟の建物跡である。南北の総長が 16.6

第24图 第110次调查区1官衙遗物配置图



m となっており、方四町II期官衙の内部では第77次調査のSB1210 建物跡（南北桁行7間、東西梁行2間、南北長18.3m）について長い建物跡である。この建物跡は、第107次調査で政府域の西辺区画施設の一部と考えられたSD1600 石組溝跡より西に位置している。この建物跡と石組溝跡の間が空闊地になっており、材木列や築地などの遮蔽施設は検出されていない。したがって四面附建物や石組溝によって構成される政府域が広がる可能性が出てきた。またSA1600 はSB1650 の西桁行から西へ20.0m 離れて検出されているが、この材木列が政府の区画施設となるならば、これまでの第44次、第48次、第55次、第101次調査区などで、材木列の延長部が検出されるはずである。これまでの調査ではそのような遺構は発見されていないことから、このSA1660 は屈曲して西方へ延びる遺構と推定される。方四町II期官衙の政府を区画する明瞭な遮蔽施設が発見されない状況は、政府東半の第77次、第73次調査でも同様であり、この点については「VII 総括」において検討を加える。

B群とした遺構の中でSA730一本柱列は、第102次調査が実施されるまでは方四町II期官衙の政府の区画施設と考えられてきた。しかし第102次、第107次調査では推定された位置で検出されず、SA730一本柱列は第55次調査区と第107次調査区の間で途切れているか、建物跡の一部になる可能性を指摘しておいた（註4）。今回の調査で、第55次調査で検出したSA730 北端の柱穴から西に屈曲し、6間分延びている一本柱列であることが明らかとなった。このSA730 は柱穴の重複が認められるものがあり、2時期の建替か部分的な補修が行われていた可能性がある。この「U」の字に曲がる配置は、SB1455 掘立柱建物跡の北、東面を遮蔽する位置にあたる。またS730 の北側には3.6m 離れて平行するようにSD1628 があり、SD1628 と直交するようにSD1673 がある。先に触れたSA730と共に、A→B→Cへと建て替えられるSB1455 に対応して、これらの溝跡が一本柱列とともに造り替えられていたものと考えられる。

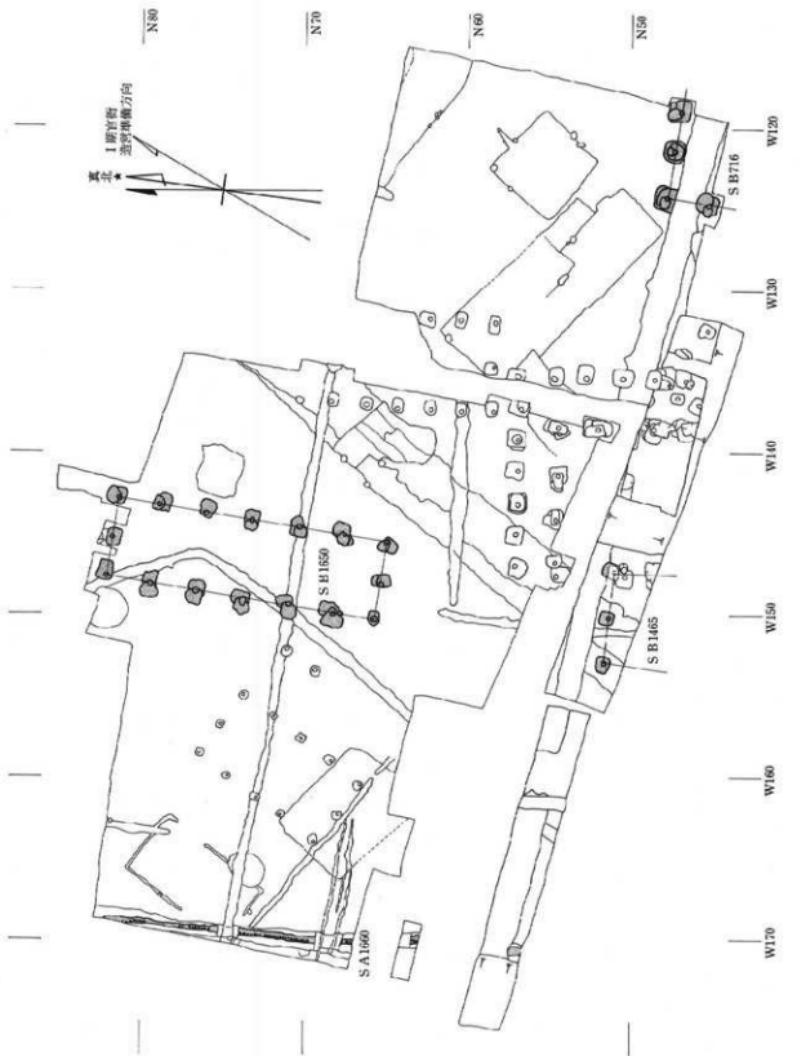
SB777は第55次調査では建物跡の南東部のみを検出していた。今回の調査によって南北桁行5間、東西梁行2間の建物跡があることが明らかになった。なおこの建物跡はSD1628 に切られていることから、II-B期の中でもSD1628・SD1673と共に建っていたと考えられるSB1455とは時期差があったことが考えられる。

(3) その他の遺構と遺物

以上の遺構のほかにSE1658とSI1636について、若干の検討を加えておきたい。

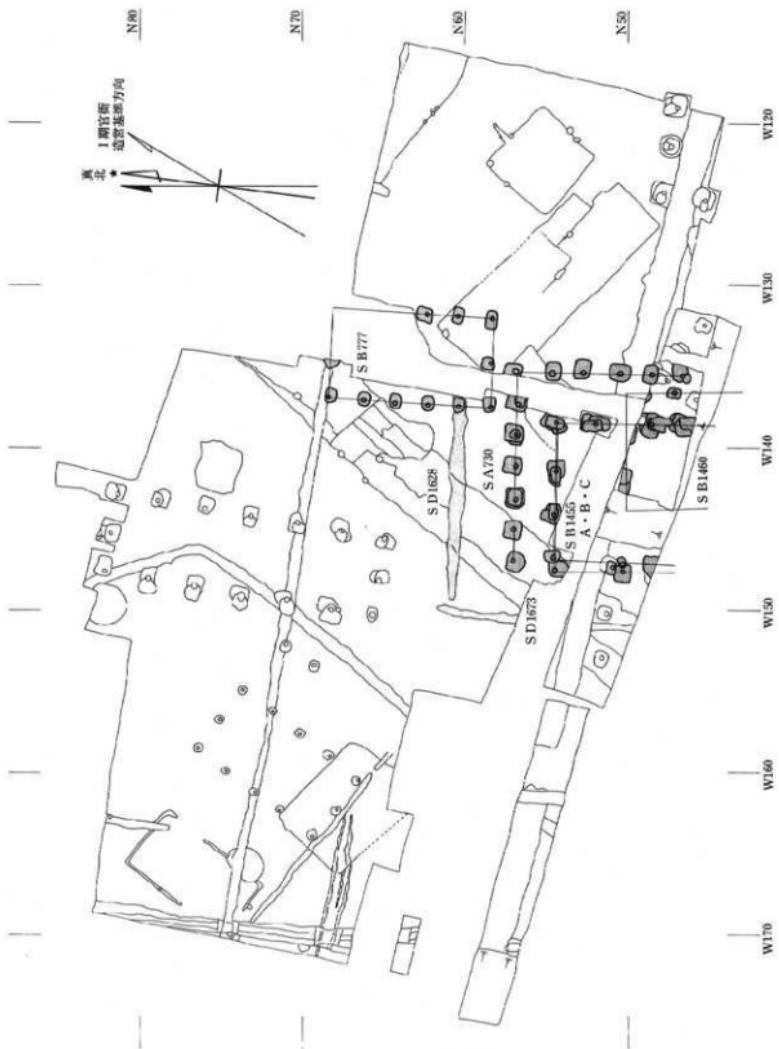
SE1658はI期官衙の時期と見られるSI1666を切っている。方向は西辺で掘り方がN-2°-W、井戸枠がN-9°-Eである。出土した遺物は、井戸枠内の底面付近から出土した土師器の壺類がある。そのう土師器C-778は、最大径が体部の中央にあり、ハケメ調整の顕著なものである。口縁部は「く」の字に外傾し、体部と頸部の段は不明瞭である。このような壺は、東北地方の土師器編年で古墳時代後期の標識遺跡となっている仙台市栗遺跡や、古墳時代前期から平安時代までの土師器を出土した名取市清水遺跡などで出土している7世紀代の土師器と共に通する特徴を示すものである。このような土器を出土したSE1658はSI1666を切っており、II期官衙の時期の遺構とも考えられるが、I期官衙の遺構も数時期の変遷があることを踏まえると、現時点ではI期官衙あるいはII期官衙のいずれの時期にも限定するのは困難であり、今後の課題としておきたい。

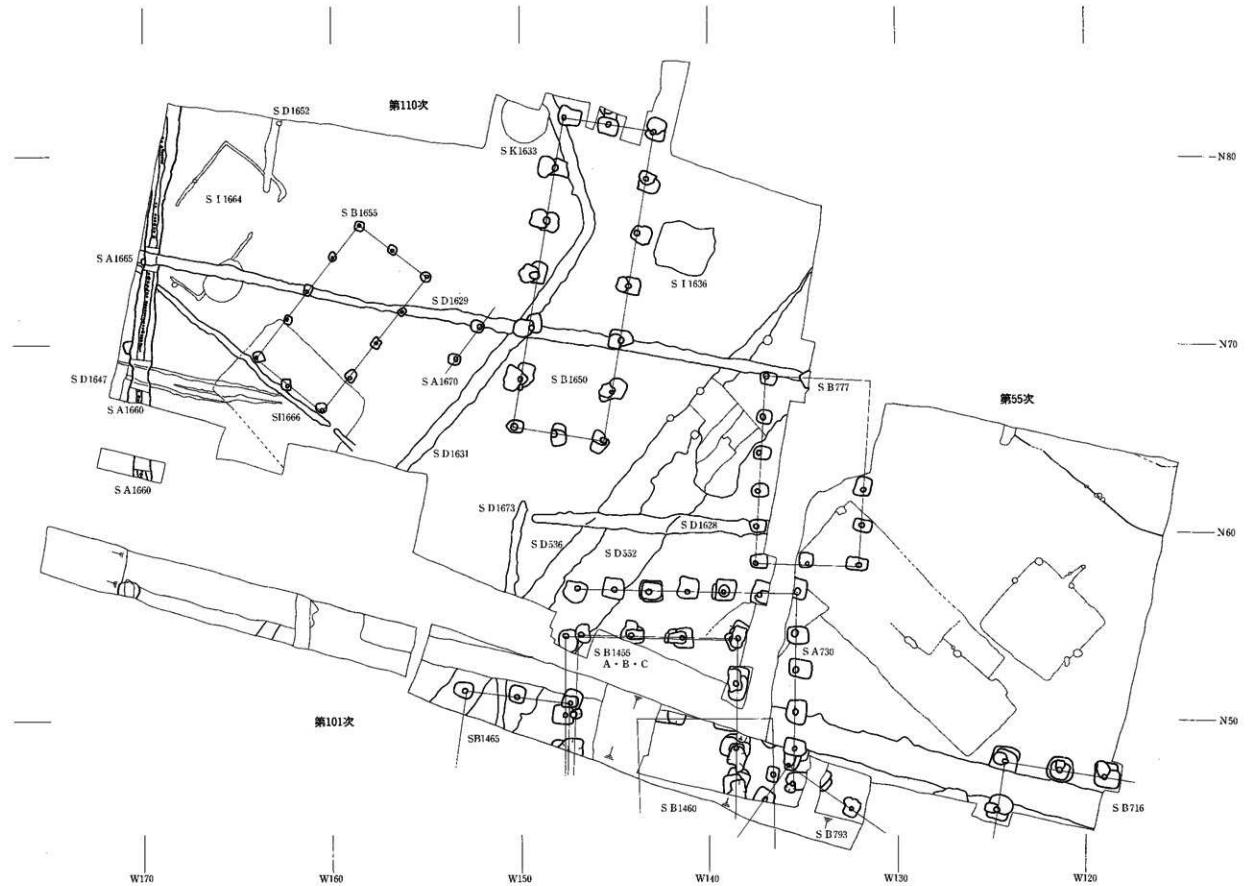
SI1636は一辺が2~3m程のきわめて小規模な遺構である。遺構の検出時に出土した土器の中には赤焼き土器の壺があり、9世紀末以降の年代が与えられる（註5）ことから、官衙とは直接関連のある遺構ではない。ただし、このような土器を出土する遺構は、第55次調査のSI776や第107次調査のSK1577などの方四町II期官衙の中核部であった範囲に限られている。官衙廃絶後のこの付近の使われた方が注目される。



第25图 第110次调查区II-A期遗物配置图

第27图 第II次调查区 II-B 前景概略图





第26図 第55次、第101次、第110次調査区遺構配置図

IV 第111次発掘調査

1. 調査経過

第111次調査区は方四町II期官衙の中央地区に位置し、平成元年度に実施した第83次調査区の南側に接している。また周辺では昭和60年度に第51、54次調査、昭和63年度に第77次調査、平成7年度には第107次調査などが実施されている。

これまでの調査では、II期官衙の中核地区として正殿としたSB1250掘立柱建物跡や石敷造構、石組池、石組構などが発見されている。これまでこの地点に仮設の郡山調査事務所が建っていたため、発掘調査が実施できなかつた箇所である。方四町II期官衙の正殿としたSB1250掘立柱建物跡の南前面の様相を明らかにするために発掘調査を実施した。

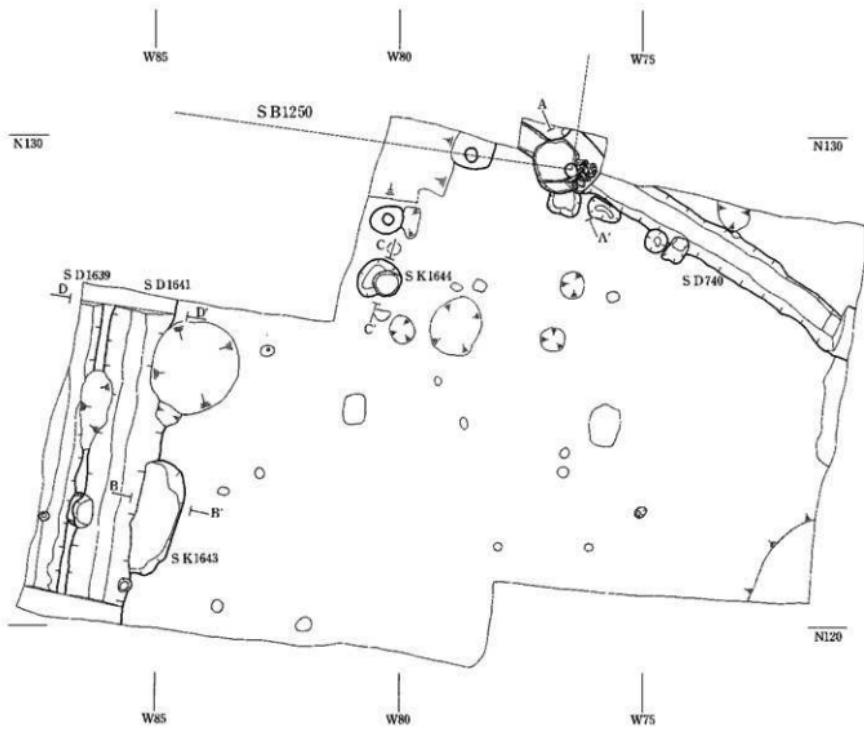
現況は標高10.4~10.7m程の畠地である。調査区を設定し、8月27日から表土排除を行なった。表土の厚さは0.3~0.5m程である。その後遺構の検出作業に入ったが、畠の天地返しを深く受け、遺構が著しく削平されていた。遺構の概要が明らかとなった9月28日に、第110次調査地とともに現地説明会を実施し、調査成果を公表した。その後、実測図を作成し、9月30日に調査を終了した。さらに埋め戻し及び整地作業などの全てが終了したのは10月2日である。

2. 発見遺構・出土遺物

今回の発掘調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、土坑2基、ピットなどである。これらの遺構は表土（I層）直下の基本層位第II層上面で検出されている。



第28図 第111次調査区位置図

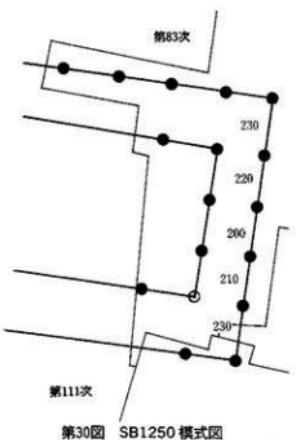


第29図 第111次調査区平面図

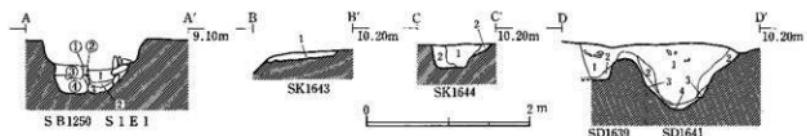
SB1250 堀立柱建物跡 調査区の北端で柱穴を検出した。第83次発掘調査との関連からII期官衙の正殿と考えられるSB1250堀立柱建物跡の一部である。SB1250堀立柱建物跡は、桁行8間、総長17.4m、梁行5間、総長10.8mの四面廂付建物跡で、方向は梁行でN-1°-Eである。今回の調査で検出した柱穴のうち、西側の柱穴は第83次発掘調査でも検出したS 1 E 2柱穴である。東側の柱穴はS 1 E 1柱穴で、建物跡の廂部分の東南隅の柱穴である。S 1 E 1柱穴の掘り方は93cm×104cmの隅丸方形で、深さは70cm程度である。柱痕跡は直径26~30cmで、周辺には5~30cm程度の河原石が設置されている。埋土は黄褐色シルト質粘土、黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD740溝跡に切られている。

SD740溝跡 上幅75~85cm、底面幅35~45cm、深さ7~47cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。



第30図 SB1250 模式図



層位	土色	土性	標
SB1250 (S1E1)			
柱穴1	10YR3/2 黑褐色	粘土	
# 2	10YR5/3 K, 5/1 黄褐色	砂質シルト	
# 3	10VK5/2 灰褐色の	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む
盛り方2	10VR4/4 黄褐色	粘土質シルト	
# ②	7.5Y3/1 黄褐色	粘土	
# ③	10VR5/8 黄褐色	シルト質粘土	
# ④	10VR2/2 黑褐色	粘土	
SK1643			
1	10YR4/3 に、5/1 黄褐色	シルト	

層位	土色	土性	標
1	10YR4/2 に、5/1 黄褐色	粘土質シルト	
2	10YR4/3 に、5/1 黄褐色	シルト	
SD1639			
1	10YR4/3 に、5/1 黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
2	10YR4/4 黄褐色	シルト	に、5/1 黄褐色シルトを斑状に含む
SD1641			
1	10YR4/3 に、5/1 黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
2	10YR5/1 黄褐色	粘土質シルト	ED=8.80m, ハイブリッド=8.80m, ワンダ=9.20m
3	10YR4/4 黄褐色	シルト	に、5/1 黄褐色シルトを斑状に含む
4	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄とマンガン鉄を含む, T層部に含む

第31図 第111次調査区SB1250掘立柱建物跡・溝跡・土坑断面図

方向はE-33°-Sで、検出した総長は7.6mである。第54次、第83次調査でも延長部を検出している。遺物は出土しなかった。

SB1250 掘立柱建物跡を切っている。

SD1639 溝跡 上幅120cm以上、底面幅12~25cm、深さ17~35cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。方向はN-2°-Eで、検出した総長は6mである。さらに調査区外に延びている。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。上層ではSD1641溝跡と同時に埋没した様相を示している。

遺物は土師器片が出土している。

SD1641 溝跡 上幅90~120cm、底面幅30~40cm、深さ70cm程、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-2°-Eで、検出した総長は6mである。第83次SD1253溝跡の延長部と推定される。堆積土はにぶい黄褐色シルト、灰黄褐色シルト質粘土などである。上層ではSD1639溝跡と同時に埋没した様相を示している。

遺物は、須恵器E-391(図版19-5)、甕片、陶磁器片が出土している。

SK1643 土坑を切っている。

SK1643 土坑 長軸2.40m、短軸0.90m以上の楕円形の土坑で、深さは5~10cm程である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

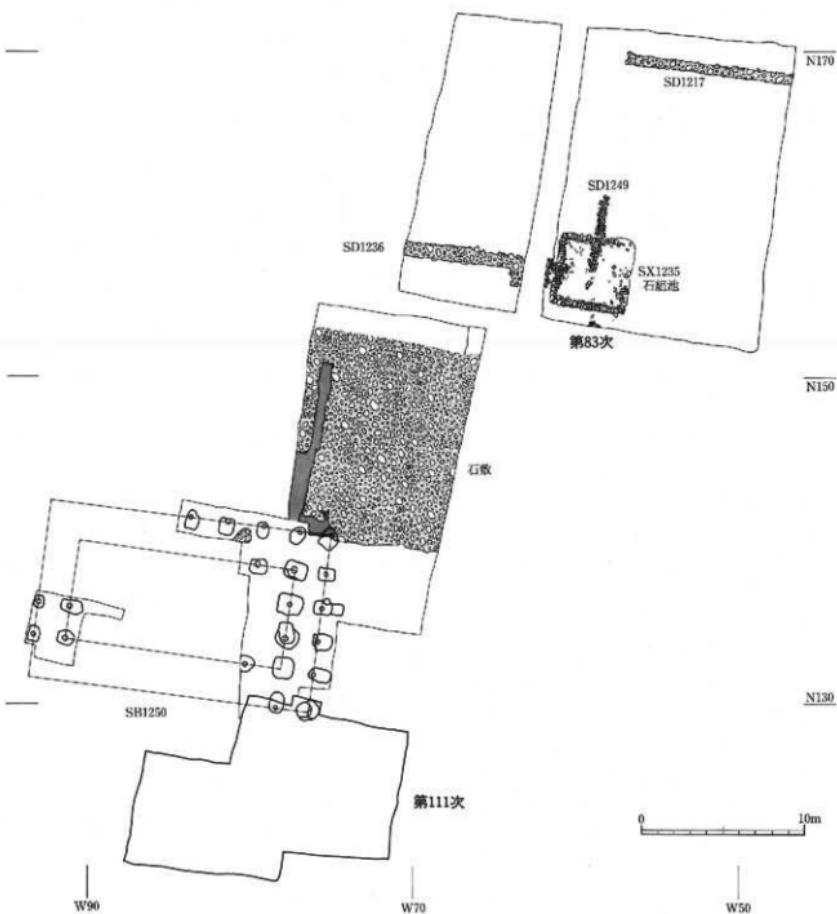
SD1641 溝跡に切られている。

SK1644 土坑 長軸0.90m、短軸0.82mの楕円形の土坑で、深さは27cm程である。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり、上方で緩く立ち上がる箇所がある。堆積土は灰黄褐色シルトで、灰白色の火山灰を斑点状に含んでいる。遺物は出土しなかった。

3. まとめ

発見された遺構のうちSB1250掘立柱建物跡は、第83次調査で検出した同遺構の延長部にあたり、それより推定された位置で柱穴を検出した。第83次調査では建物跡の全域を調査していないが、SB1250は東西桁行8間(総長17.1m)、南北梁行5間(総長10.8m)の四面廻付建物跡と考えられた。今回の調査では建物跡の南東隅の柱穴が発見されたことにより、建物跡の南部分の東辺が確定した。東辺の梁行は総長が11mで、柱間寸法は210~230cmである。なお南部分では230cmの同距離となっている。方向はN-0°-Eの真北方向である。ここで第83次調査での報告に付け加えておく。

このSB1250掘立柱建物跡は、方四町II期官衙の中では唯一の四面廻付建物跡であり、政庁の正殿と考えられた(註6)。この建物跡の北側には石敷遺構や石組池、石組溝跡があり、政庁を構成していたと考えられている。このうちSX24石敷遺構はSB1250の北側でのみ検出され、東側には広がっていなかった。今回の調査では南側の様相を明らか



第32図 政府北部遺構配置図

かにすることが目的であったが、調査した結果は東側と同じく南側でも石敷遺構は検出されなかった。また調査区の断面や表土上にも石敷遺構の痕跡を示すような石の集積は認められなかった。調査以前に削平され、痕跡を全く留めていないという可能性もあるが、隣接する調査地で石敷遺構や石組池、石組溝跡が残存している様相を見ると、むしろ正殿としたSB1250の北側にのみ石敷遺構が設置されていたと考えた方が妥当であろう。なお方四町II期官衙の政府の構造については、「VII 総括」において若干の検討を行う。

V 第113次発掘調査

1. 調査経過

第113次調査区は方四町II期官衙に併行して造営された都山庵寺の東部にあたる。周辺では昭和56年度の第12次、第15次調査や昭和61年度の第62次、第63次調査、昭和62年度の第70次調査などが実施されている。そのうち第62次調査では、寺院中枢部分を囲むとみられるSA830材木列が検出されている。また第70次調査ではSA830材木列の南延長部において、同様のSA1066材木列を検出している。これらのことから講堂や僧房などの中枢伽藍を取り囲むとみられる材木扉の区画が、東西81m、南北132m程の範囲に延びていると推定していた。今回の第113次調査地は、寺院の中軸を区画する材木列の東辺部が通過すると推定された地点である。

現況は標高9.3m程の郡山中学校の校庭である。調査区を設定し、10月28日から表土排除を行なった。表土は校庭の盛土が0.5~0.8m、さらにその下層の畑の耕作土があり0.2~0.4m程である。表土排除の後に遺構の検出作業に入ったが、推定した材木列は検出されなかった。実測図の作成や補足の測量などを行ない、11月7日に調査を終了した。

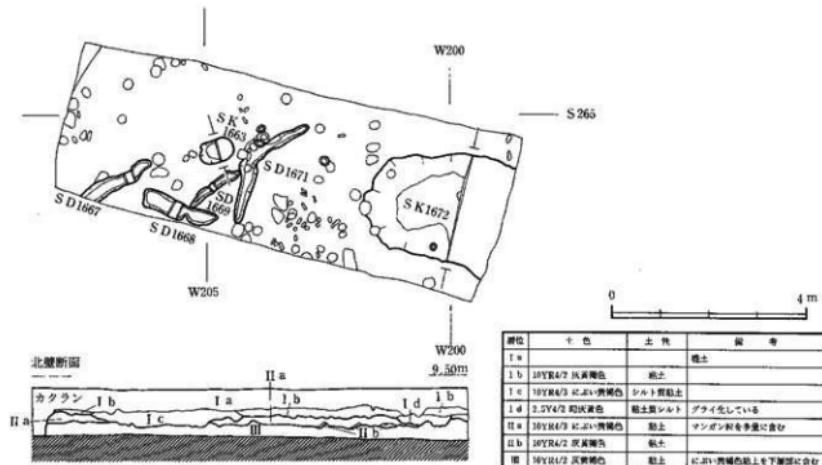
2. 発見遺構・出土遺物

今回の発掘調査で発見された遺構は、溝跡4条、土坑2基、ピットなどである。これらの遺構は畑の旧耕作土直下の基本層位IV層上面で検出されている。

SD1667溝跡 上幅20~35cm、底面幅12~19cm、深さ3~6cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-54°-Eで、検出した総長は1.6mである。さらに調査区外に延びている。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。



第33図 第113次調査区位置図



第34図 第113次調査区平・断面図

SD1668 溝跡 上幅17~40cm、底面幅10~27cm、深さ4~9cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE-11°-Sで、検出した総長は1.55mである。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

遺物は土器器片が1点出土している。

SD1669 溝跡 上幅5~15cm、底面幅3~12cm、深さ1~4cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-47°-Eで、検出した総長は1.25mである。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1671 溝跡 上幅15~43cm、底面幅7~16cm、深さ3~6cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN-4°-EからN-54°-Eへ、「く」の字状に延びている。検出した総長は2.7mである。堆積土は、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

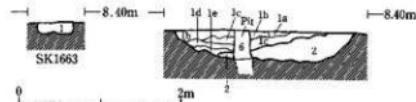
SK1663 土坑 長軸0.70m、短軸0.56mの隅丸方形の土坑で、深さは10~14cm程度である。底面は凹凸があり、壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は黒褐色シルト質粘土である。

遺物は土器器片が少量出土している。

SK1672 土坑 長軸2.90m、短軸2.20mの不整長方形の土坑と推定され、深さは25~35cm程度である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色、暗褐色シルト質粘土、粘土などである。

遺物はG-77 平瓦（第35図4）、土器器片・甕片、須恵器器片、瓦片が出土している。

P 6に切られている。



層位	土色	土性	備考
SK1672	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	
I a	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	
I b	10YR4/4 黑褐色	シルト質粘土	マンガン粒と粘土を微量に含む
I c	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	
I d	10YR3/7 暗褐色	粘土	マンガン粒と粘土を微量に含む
I e	10YR4/3 褐色	粘土	
2	10YR2/2 黑褐色	炭化物と粘土を少量含む	
Pit 6	10YR2/3 黑褐色	粘土	炭化物を微量に含む

第35図 第113次調査区土坑断面図



第36図 第113次調査区出土遺物

3. まとめ

今回の調査は、方四町II期官衙と併行する郡山廃寺の中枢を区画する材木列を検出することが目的であった。これまでの周辺の調査で寺院の中枢を区画する材木列は、北辺で第62次調査のSA830、西辺で第70次調査のSA1066などが発見されている。これらの材木列と第12次調査で検出した講堂基壇跡のSB100、第63次調査の僧房と推定したSB890、900などの掘立柱建物跡との関係から、東西約81m、南北約132mの材木列によって区画された伽藍中枢部を想定していた(註7)。伽藍中枢部の東辺については、これまで調査は実施されておらず、推定にとどまっていた。今回、郡山中学校の校庭内に材木列の通過する位置を推定し、調査区を設定した。しかし材木列は検出されず、寺院の範囲については再検討する必要が生じた。「VII 総括」において若干の検討を行なう。

番号	登録番号	器形	出土遺構	層位	台面調査	内面調査	参考	写真図版
1	G-78	平瓦	—	豆層中	縮印き→ナデ	布目痕→ナデ	織巻き	20-6
2	F-78	軒丸瓦	—	豆層中	—	—	—	21-3
3	G-76	平瓦	—	豆層中	縮印き→ナデ	布目痕→ケズリ	織巻き	21-1
4	G-77	平瓦	SK1672	I層	縮印8→ナデ	布目痕	織巻き	21-4

VI 第114次発掘調査

1. 調査経過

第114次調査は、仙台市太白区郡山3丁目23-8伊藤みきほ氏より、同住所において住宅の解体新築に伴う発掘届が、平成8年11月26日付けで提出されたために実施した。

調査地点は、方四町II期官衙内部の北東地区にあたる。周辺では昭和57年度の第24次・31次調査や昭和58年度の第35次調査、昭和61年度の第61次調査などが行なわれている。第35次調査では、II期官衙に属する井戸跡が検出され、井戸枠内から総数100個体にのぼる土師器壺がつめ込まれた様な状況で出土している。また、第24次・35次・61次調査では、II期官衙の一本柱列による堀跡や掘立柱建物跡、I期官衙の倉庫建物群や官衙雜舎建物群とそれらを囲む材木列や一本柱列による堀跡などの多くの遺構が集中的に発見されている。

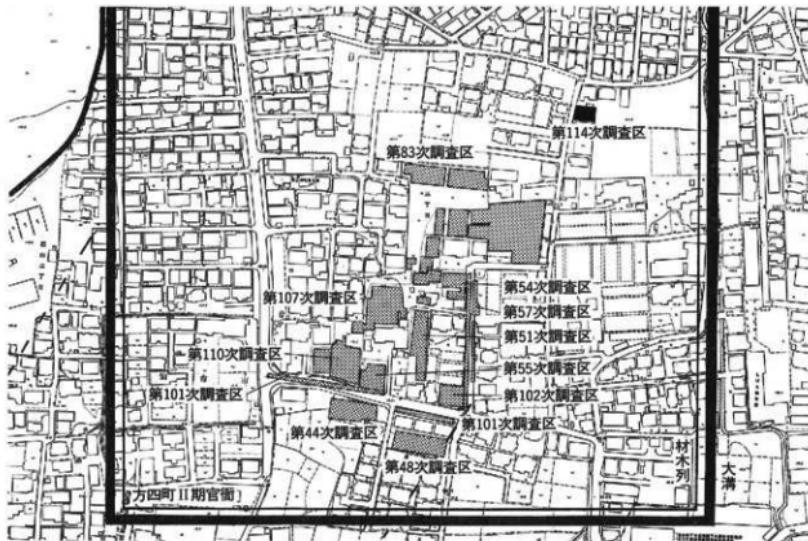
調査は12月9日に、敷地の北側部分で1.5×6mの調査区を設定して行なった。

2. 発見遺構・出土遺物

調査地点は、以前に煉瓦用の粘土採取に伴う掘削を受けていたと推定された場所であった。発掘調査の結果、掘削が予想以上に深く、地表下2m以上に擾乱の及んでいることが確認された。遺構・遺物は発見されなかった。

3. まとめ

本調査地点は、周辺の調査結果からI期及びII期官衙に関わる遺構の発見が期待されたが、調査区全面に擾乱が及んでいるため遺構は検出されなかった。



第37図 第114次調査区位置図

VII 総括

今年度の発掘調査は、第4次5ヵ年計画における第2年次目にあたる。第4次5ヵ年計画では、方四町II期官衙の中核部の実態を明らかにすることを目的としている。とくに昨年度と今年度は、国庫補助事業の「遺跡発掘事前総合調査」として実施している。今年度は昨年度に引き続き、政府西辺部の遺構の様相を明らかにする目的で第110次調査を実施した。またこれまで調査されなかった政庁正殿の南前面の様相を明らかにするために、第111次調査を実施した。さらにII期官衙と併行する郡山廃寺の中核伽藍の範囲を明らかにするために、第113次調査を実施した。この他に「仙台平野の遺跡群発掘調査」で、個人住宅の建替えに伴って第114次調査を実施している。これらのうち第110次、第111次調査では、方四町II期官衙の中核部である政庁の範囲と構造について一定の成果を得たものと考えている。

1. II期官衙の調査

(1) II期官衙政庁について

昨年の第107次調査ではSD1600石組溝跡を発見し、これを政庁域の西辺区画施設の一部と考えた。今回の調査では石組溝跡のさらに西方の様相を明らかにするために調査を実施した。その結果、II-A期(註8)の遺構の中では、SD1600石組溝跡とともに政庁域を区画するような遮蔽施設の痕跡は検出されなかった。しかしSD1600石組溝跡から西に15.8m離れて、南北棟のSB1650掘立柱建物跡が発見された。方四町II期官衙の中でこの建物跡は、正殿であるSB1250を除くと、正殿の東に位置するSB1210(桁行7間、梁行2間、南北長18.3m)に次ぐ長い建物跡である。このSB1650は第101次調査のSB1465(註9)や第44次調査のSB526と桁行の方向を揃えて、南北に建ち並んで列をなしている。これらの建物跡の列は、外郭南門と正殿であるSB1250を通るII期官衙推定中軸線(1)で折り返す(註10)と、SB1210も対称の位置にあり、棟を揃えた建物跡の列が政庁正殿を挟んで東西両側に配置されていたものと考えられる。政庁内の遺構と考えられるSX1235石組池からSB1210との間には、今回の調査区と同じように遮蔽施設の痕跡は発見されていない。さらに今回の調査でSB1650の西側では、20m離れて南北方向のSA1660材木列があり、その間が空闊地となっていた。この状況も第77次調査のSB1210の東側が空闊地となって、17.5m離れて小規模なSA1069一本柱列が検出されているのときわめて類似している。

第38図を見ると、南と北の区画は明らかではないが、東西はこの建物列の内側に正殿(SB1250)、石敷(SX24)、石組池(SX1235)や建物跡(SB1555、1545、716、1490)が配置されているのではないかと想定される。東西の幅はSB1650とSB1210の棟通りの延長上で、105m程である。

今年度の第111次調査では、石敷は正殿の南側には延びていなかった。第83次調査の成果と合わせて



第38図 方四町II期官衙中枢部 (1/2000)

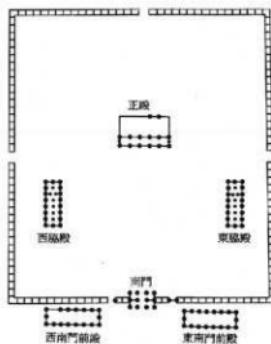
ると、正殿と石組池との間にのみ石敷があることになる。これは正殿や石組池の使われ方がいかなるものかであったかを考える上できわめて重要であり、注目される。南方のSB1555、1545、716、1490については、SB1555が建物の東西の規模は明らかではないが、床束を持ち、柱痕跡、柱掘り方とも周辺の建物跡よりも大きく、主要な建物跡であった可能性がある。SB1555がこれら南半の建物群の中で主要殿舎とするならば、8世紀になって造営される陸奥国府である多賀城跡の政庁Ⅰ期の遺構配置にも通じる点（註11）がある。本遺跡の場合は調査の対象地が住宅地となっているため、調査区の制约が多く遺構の詳細が把握できないところがある。今後この点については、要所と推定される箇所で小規模な調査を積み重ねて解明して行きたい。

このような方四町Ⅱ期衙中権の様相から政庁の範囲をどこまでとするかは、建物跡の列が東西両側に配置されているならば、そこまでを政庁の範囲とすることも可能であろう。しかし現時点では、東側が第77次調査のSB1210の一棟と、第20次調査のSB208の柱穴のみでは断定するのは難しいと考える。それら建物跡の列に挟まれた範囲を政庁とするか、その中の正殿や石敷、石組池、さらにSB1555を中心とした遺構群に限定するかは、SB1210の南方に想定した建物跡が配置されているかどうかを確認した上で判断していきたい。

(2)郡山廃寺について

これまで郡山廃寺の中権伽藍は東西81m、南北132mの材木列によって区画されていると考えられていた。しかし今年度の第113次調査によって、区画する材木列の推定された東辺の位置では検出されなかった。よって郡山廃寺の中権伽藍の範囲については、再検討をする必要が生じた。周辺におけるこれまでの調査では、昭和56年度に実施した第15次調査で、真北方向のSA177杭列跡が発見されている。掘り方は幅40cm、深さ40cmの布掘りで、その中に直径10~15cmの杭痕跡が密接して検出されている。

断面の観察から先けずりの杭を打ち込んだものとしている。しかし第62次や第70次調査で中権伽藍の区画施設としたSA830、1066材木列などと、掘り方や材木痕跡の形状からは差異を見出しがたい。また第15次調査ではこの杭列とした遺構の西側にSE157井戸跡があり、寺に関わる木簡（註12）が出土しており、現時点ではこのSA177杭列跡までは寺の範囲に含まれるものと考えておきたい。しかしその範囲が寺院の中権伽藍の範囲なのか、中権伽藍にともなう関連施設を含んだ範囲なのかについては、さらに周辺の発掘調査により検討して行きたい。



第39図 多賀城政庁第Ⅰ期遺構配置図 (1/2000)



写真1 第15次調査 (SA177 と SD142)



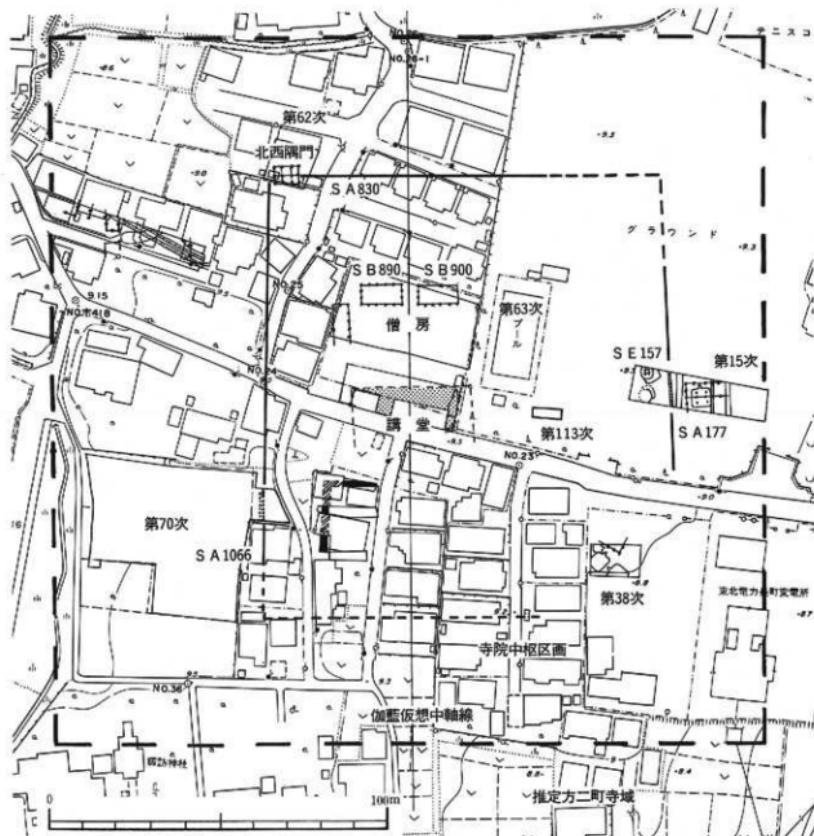


図41 猿山廃寺全体図

2. I期官衙の調査

今年度の調査では、第110次調査区からI期官衙の遺構が発見されている。周辺の調査区でも発見されているSD536、552溝跡と、SD1631溝跡に挟まれた間が通路として使用されているのではないか(註13)と考えられた。第110次調査のSD1631溝跡より西では、SB1655掘立柱建物跡やSA1665材木列などの遺構があり、2ないし3時期の変遷が確認された。SD536、552溝跡の東側の第44次、第55次、第101次調査区でも、SB507掘立柱建物跡、SI726竪穴住居跡などの遺構があり、やはり数時期の変遷があるようである。SD536、552溝跡は北方への延長位置にあたる第107次調査区までは延びておらず、東側に位置する第55次調査区で検出したSD767と形状、規模が近似していることから、SD536、552溝跡は第110次調査区の北でほぼ直角に曲がりSD736につながるものと見られる。SD536、552やSD767は、これまでも官衙内の区画溝と考えられてきた(註14)。ただし第55次調査区より東では、延長部が検出され

ておらず不明である。

SD1631溝跡より西側と、SD536、552溝跡より東側の遺構は、第55次、第107次調査で発見されている大型の建物跡や純柱建物跡が配置される様相とは異なり、小規模な建物跡や住居跡が隣り並んでいる。これについてはⅠ期官衙の内部が官衙建物群や倉庫建物群、昇穴住居跡による工房や雜舎建物群など、機能の違ったブロックが連結して構成されているためであろう（註15）と考えている。今回発掘調査した地点がⅠ期官衙中枢部の南に位置し、中枢部とは違った機能を果していた地域の中に含まれるのであろう。

Ⅰ期官衙内部のブロックごとの機能の違いについては、不明なところが多い。中枢部の構造の解明とともに、各ブロック機能についても今後の調査により検討して行きたい。

3.『遺跡発掘事前総合調査』について

平成7年度と平成8年度は、これまで実施してきた国庫補助事業である「郡山遺跡緊急範囲確認調査」の他に、同じ国庫補助事業の「遺跡発掘事前総合調査」を加えて実施している。郡山遺跡の調査は昭和55年度から始まり、これまで第1次、第2次、第3次5ヵ年計画の実施を経て、今年度は第4次5ヵ年計画の2年次目にあたる。第3次5ヵ年計画の最終年次に実施した第102次調査の成果から、これまで想定していた方四町Ⅱ期官衙の政庁の範囲について、再検討をする必要が生じていた。また昭和55年当時とは遺跡やその周辺は、宅地の増加だけでなく、JR長町貨物駅の廃止や郡山中学校の建て替え、市道の改良などで、大きく変貌しつつある。これまで地権者をはじめ、地元の方々から遺跡の発掘調査に多大な協力をいただいてきた。しかし今後とも貴重な歴史遺産として、遺跡の保護を進めて行くためには、遺跡の内容を踏まえた活用や土地利用を明らかにし、住民や関係機関に理解を求めていくことが重要である。よって第4次5ヵ年計画の開始にあたり、方四町Ⅱ期官衙の政庁の範囲を早急に明らかにすること、それを基に遺跡の保護、活用を検討することが必要となり、文化庁の指導を受け「遺跡発掘事前総合調査」を実施した次第である。発掘調査した結果、方四町Ⅱ期官衙の中枢部の様相がこれまでより明らかになった。今後それらを踏まえて、遺跡の保護、活用の検討に役立てて行きたい。

註

註1 第44次調査 昭和59年度発掘調査概報「郡山遺跡V」 P22、25のSD536溝跡の記載の中に、SD536がSD552を切っているとある。

これは平面上での重複関係が明瞭でなかったためで、今回の調査報告の通り訂正する。

註2 第55次調査 昭和59年度発掘調査概報「郡山遺跡VI」 P62、81

註3 第102次調査 平成6年度発掘調査概報「郡山遺跡XV」 P14、49、50

第107次調査 平成7年度発掘調査概報「郡山遺跡XVI」 P30～32、41～42

註4 第107次調査 平成7年度発掘調査概報「郡山遺跡XVI」 P32

註5 宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 第61次調査

註6 第83次調査 平成元年度発掘調査概報「郡山遺跡X」 P7、33、34

註7 第62次、第63次調査 昭和61年度発掘調査概報「郡山遺跡VII」 P31～33、62～68、79～85

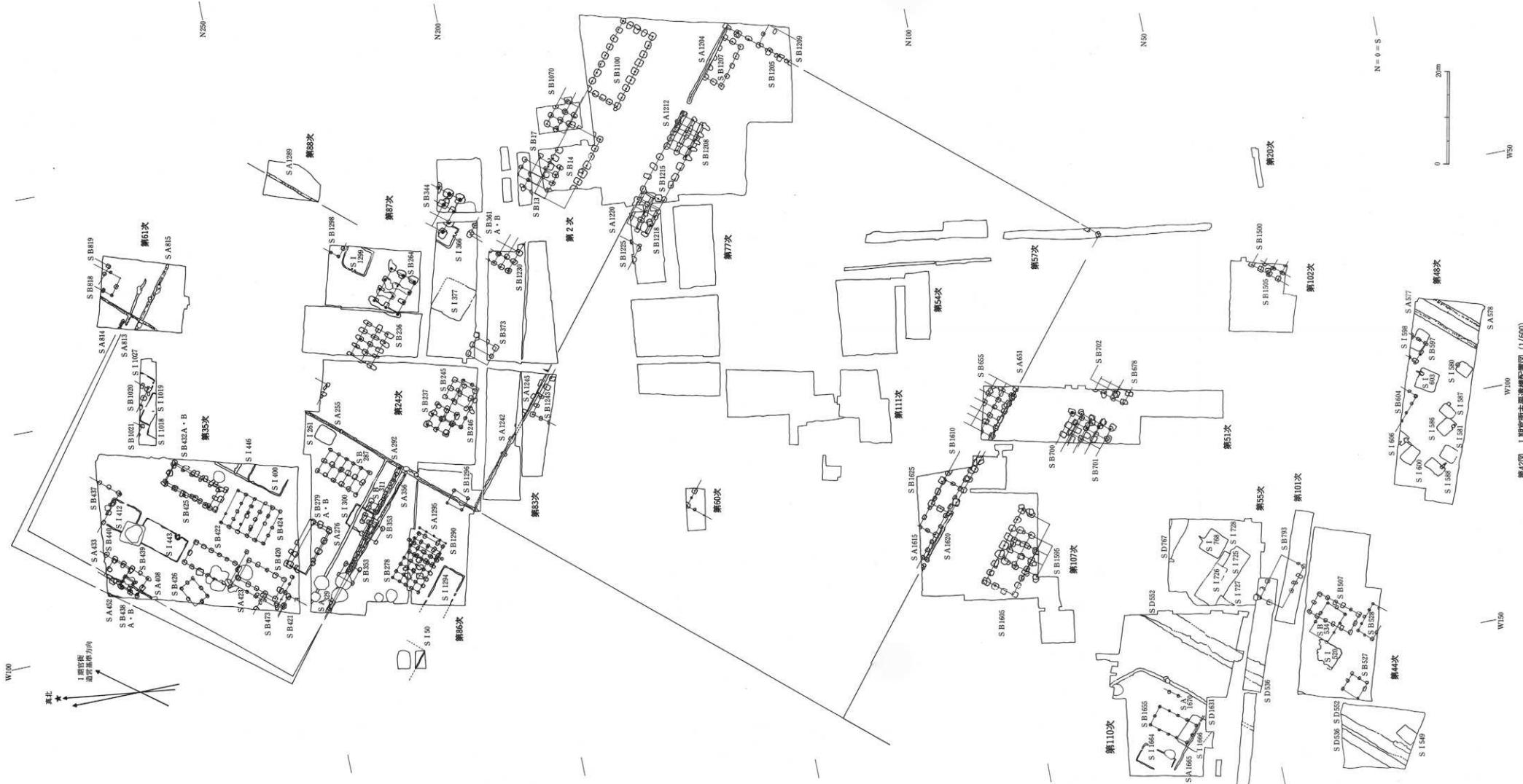
第70次調査 昭和62年度発掘調査概報「郡山遺跡IV」 P43、44、65～68

註8 註3に同じ

註9 第101次については、市道拡幅工事に伴っての調査であるため、平成9年度に予定されている最終工事区間の発掘調査が終了した後に報告する。なおSB1465については、第110次調査を実施するまでは、第110次調査区より北に延びる遺構と考えていたが、今回の調査により南に延びる遺構であることが明らかとなった。しかし第44次調査区では検出されていないことから、南北の軒行が9mを越えない建物跡と推定される。

註10 第40回参照、図中のⅡ期官衙定位輪線(2)はⅠ期官衙の外郭である南辺木列の中心から求めた線である。

註11 多賀城の創建期である政庁第Ⅰ期の遺構配置を見ると、正殿、脇殿、前殿などの配置が、本遺跡のSB1555を中心とした中枢部南半の建物配置と類似している。異なる点は多賀城の正殿が南面に面を有していることと、露地による区画が発見されていることである。



註12 第15次調査 昭和56年度発掘調査概報「郡山遺跡II」 P74~80

註13 第Ⅲ章(1) P20参照

註14 第55次調査 昭和59年度発掘調査概報「郡山遺跡VI」 P62

　総括 平成3年度発掘調査概報「郡山遺跡XII」 P27、28

註15 総括 昭和58年度発掘調査概報「郡山遺跡IV」 P72、73

註14と同じ

参考文献

仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」	「郡山遺跡発掘調査概報」	1980.	3
仙台市文化財調査報告書第29集	「郡山遺跡I」	1981.	3
仙台市文化財調査報告書第38集	「郡山遺跡II」	1982.	3
仙台市文化財調査報告書第42集	「郡山遺跡-第13次-」	1982.	3
仙台市文化財調査報告書第46集	「郡山遺跡III」	1983.	3
仙台市文化財調査報告書第64集	「郡山遺跡IV」	1984.	3
仙台市文化財調査報告書第74集	「郡山遺跡V」	1985.	3
仙台市文化財調査報告書第86集	「郡山遺跡VI」	1986.	3
仙台市文化財調査報告書第96集	「郡山遺跡VII」	1987.	3
仙台市文化財調査報告書第110集	「郡山遺跡VIII」	1988.	3
仙台市文化財調査報告書第124集	「郡山遺跡IX」	1989.	3
仙台市文化財調査報告書第133集	「郡山遺跡X」	1990.	3
仙台市文化財調査報告書第145集	「郡山遺跡-第84・85次-」	1990.	6
仙台市文化財調査報告書第146集	「郡山遺跡XI」	1991.	3
仙台市文化パンフレット第10集	「郡山遺跡」	1985.	10
仙台市文化パンフレット第18集	「郡山遺跡」	1889.	12
仙台市文化財調査報告書第161集	「郡山遺跡 XII」	1992.	3
仙台市文化財調査報告書第169集	「郡山遺跡 XIII」	1993.	3
仙台市文化財調査報告書第178集	「郡山遺跡 XIV」	1994.	3
仙台市文化財調査報告書第194集	「郡山遺跡 XV」	1995.	3
仙台市文化財調査報告書第210集	「郡山遺跡 XVI」	1996.	3
古代城柵官衙検討会	第17回古代城柵官衙検討会資料	1991.	2
仙台市文化財調査報告書第43集	「柴遺跡」	1982.	8
宮城県文化財調査報告書第77集	「東北新幹線関係遺跡調査報告書-V」	1981.	3

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主 催
8. 8. 21	遺跡見学	長島・豊村・森	八本松小
9. 26	第110次・第111次調査報道発表会	長島・豊村・森	仙台市教育委員会
9. 28	第110次・第111次調査現地説明会	長島・豊村・森	仙台市教育委員会
11. 17	郡山コミュニティーセンター祭り	長島	郡山コミュニティーセンター
12. 14	宮城県遺跡調査成果発表会	長島・豊村・森	宮城県史跡整備市町村協議会
9. 2. 8~9	第23回古代城柵官衙遺跡検討会	木村・長島・豊村・森	

2. 主催事業

(1)第25回文化財展「奈良・平安時代の仙台 一ひと・文字・くらしー」

期 間 12月3日(火)~12月15日(日)

会 場 仙台市博物館ギャラリー

来場者数 1,234名

展示内容 郡山遺跡から出土した木簡、墨書き土器や陸奥国分寺跡などから出土した刻印瓦等の文字資料の展示を中心にして奈良・平安時代の社会の様子を分かりやすく紹介し、併せてパンフレットを無料配布した。

(2)第25回文化財展記念講演会「発掘された文字が語る古代社会」

期 間 12月8日(日) 午後2時~午後4時

会 場 仙台市博物館ギャラリー

講 師 国立歴史民俗博物館 教授 平川南氏

来場者数 220名

内 容 「発掘された文字が語る古代社会」というテーマで、木簡や墨書き土器の具体例から文字資料の背後に隠された古代社会の実態を興味深く、2時間にわたり講演して頂いた。

3. 調査指導委員会の開催

第25回 郡山遺跡調査指導委員会 平成9年3月4日 北庁舎4F会議室

○平成8年度の調査成果について

○平成9年度の調査計画について

○郡山遺跡の保存整備計画について

4. 資料の貸し出し・展示

仙台市博物館 常設展 「原始・古代・中世」

東北歴史資料館 企画展 「多賀城」

多賀城市文化センター 企画展 「城柵の時代」

写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



図版 2
110次調査区東半部全景
(西より)



図版 3
SB1650 捜立柱建物跡全景
(南より)

図版4
110次調査区西半部全景
(東より)



図版5
SA1660 材木列全景
(南より)





図版6
SA730一本柱列、SB1455A・B・C建物跡全景
(西より)



図版7
SB1455A・B・CN2E1
柱穴土層断面(西より)



図版8
SB777据立柱建物跡
全景(南より)

図版9
SB1655 掘立柱建物跡
全景（南より）



図版10
SD536・SD552
溝跡全景（南より）

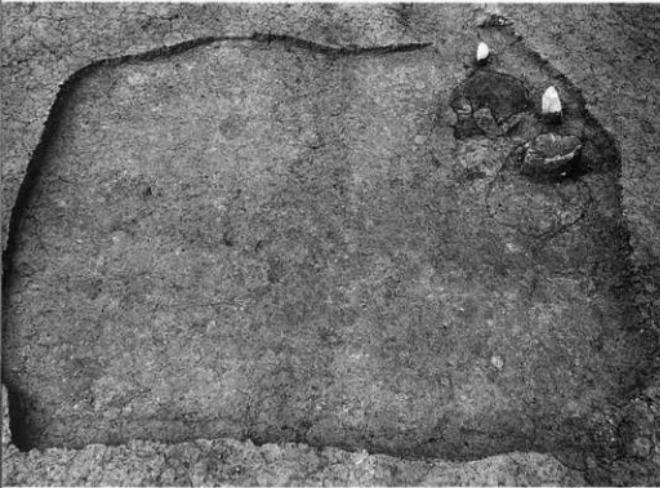


図版11
SD1631 溝跡全景
(南より)





図版12
SE1658 井戸跡遺物出土状況
(北より)



図版13
SI1636 壁穴住居跡全景
(南より)

図版14
SD1631 溝跡遺物出土状況
(東より)



図版15
SB1250 振立柱建物跡 N6E1 柱穴
全景 (西より)



図版16
111次調査区西半部全景
(南より)

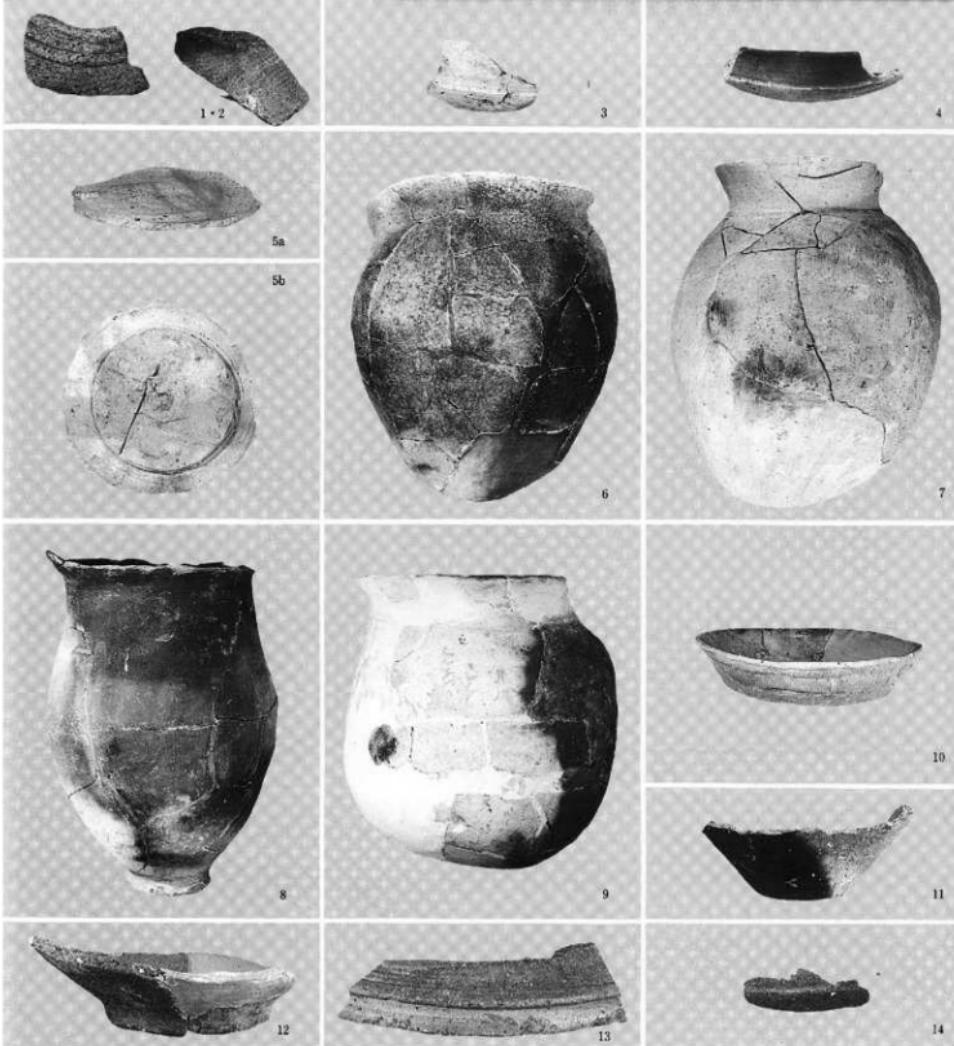




図版17
113次調査区全景
(西より)

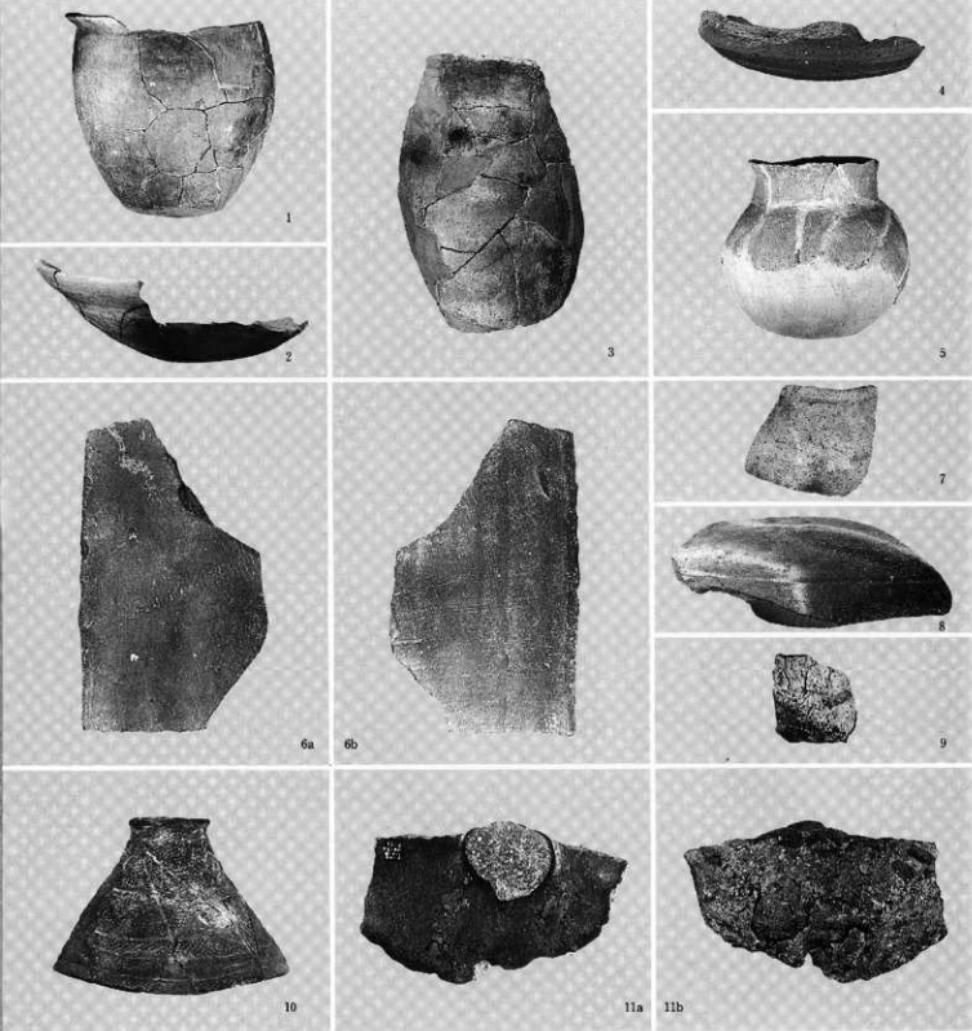


図版18
114次調査区全景
(南より)



- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 B-278 脼 遺構検出面 | 8 C-778 壺 SE1658 |
| 2 B-279 盖 SA1660 | 9 C-779 壺 SE1658 |
| 3 E-394 杯 SA1660 | 10 C-780 壺 SE1658 |
| 4 C-783 杯 SA730W1 | 11 C-784 壺 SE1658 |
| 5 E-391 杯 SD1641 | 12 C-785 壺 SE1658 |
| 6 C-777 壺 SD1631 | 13 E-390 円面鏡 SE1658 |
| 7 C-788 壺 SD1631 | 14 E-393 杯 SE1658 |

图版19 110次出土遗物（1）



—110次—

- 1 C-781 瓶 S I 1636
 2 E-396 壺 S I 1636
 3 C-786 壺 S I 1666
 4 E-392 壺 S K1632
 5 C-782 壺 S K1648

—110次—

- 7 C-787 壺 遺構検出面
 8 E-389 平瓶 遺構検出面
 9 P-30 フイゴ羽口 遺構検出面
 10 B-275 壺 P174
 11 X-1 駄津 P136

—113次—

- 6 G-78 平瓦 S K1672

図版20 110次・113次出土遺物（2）



1a



1b



2



3



4a 4b



5a



5b



6



7



8

- 113次—
 1 G-76 平瓦 II層中
 —110次—
 2 E-395 环 表土
 —113次—
 3 F-78 斜丸瓦 II層中
 4 G-77 平瓦 II層中
- 110次—
 5 K-210 凹石 表様
 6 C-789 环 遺構検出面
 7 E-399 环 S-11636
 8 G-79 平瓦 遺構検出面

図版21 110次・113次出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき							
書名	郡山遺跡							
副書名	平成8年度発掘調査概報							
巻次	XVII							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第215集							
編集者名	長島栄一、豊村幸宏、森 剛男							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214 8893~8894							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こおりやまいいせき 郡山遺跡	みやぎけん仙台市 たいほくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13' 13"	141° 18' 30"	19930704 ~19961209	1,130m ²	重要遺跡 の範囲 確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺跡	特記事項			
郡山遺跡	官衙跡	古墳 奈良	掘立柱建物跡 一本柱列・材木列 溝跡・土坑 竪穴住居跡	土師器・須恵器 赤焼き土器・瓦 土製品・石製品 鉄製品				

仙台市文化財調査報告書第215集

郡山遺跡 XVII

—平成8年度発掘調査概報—

1997年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

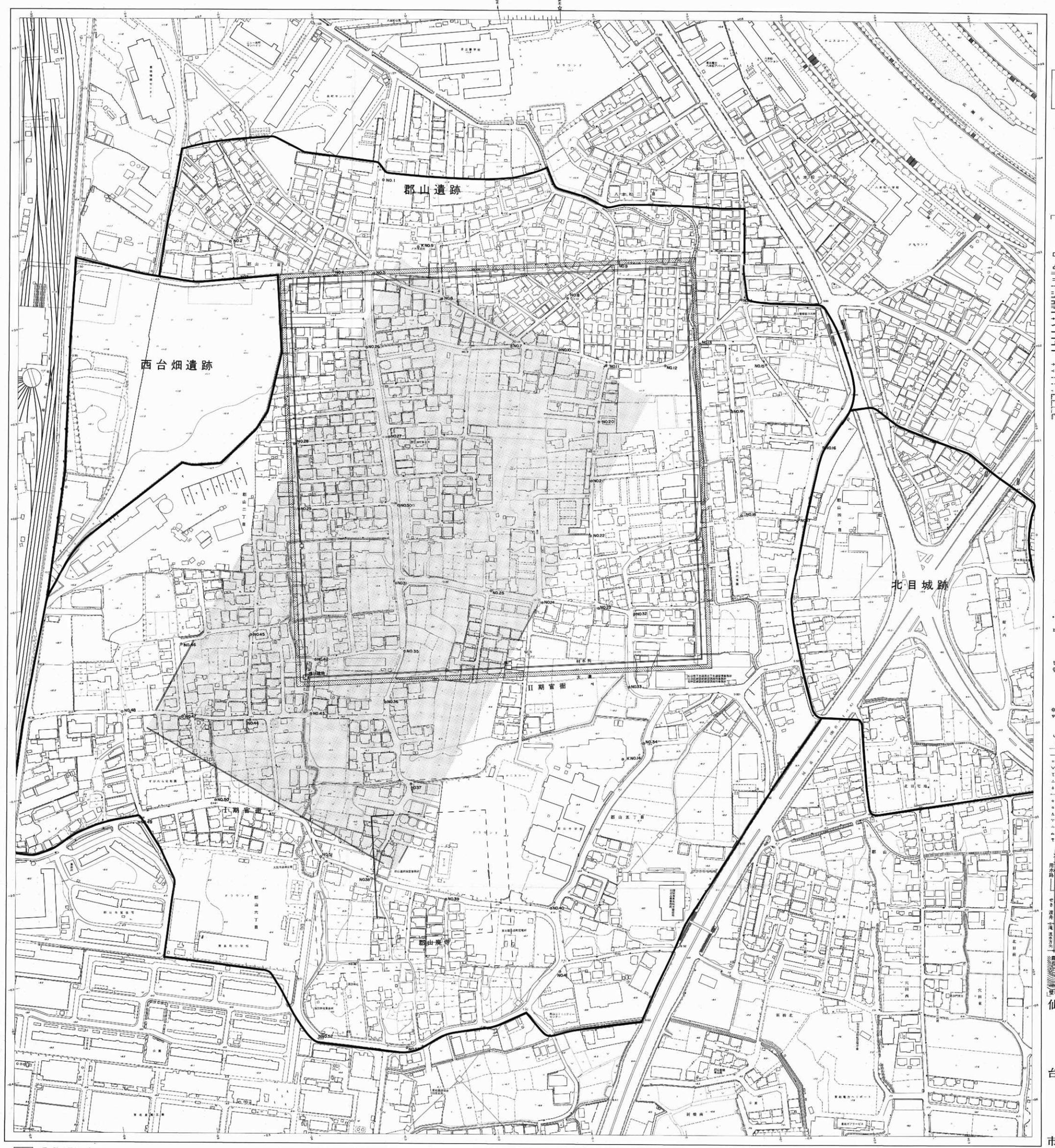
印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263 1166

郡山遺跡 XVI

郡山遺跡現況平面図



郡山遺跡現況平面図 No.3



